

# オキダ古墳群発掘調査報告書

1987

神戸市教育委員会

## 序

オキダ古墳群の所在する神戸市北区道場町は、裏六甲の山間にひろがる田園地帯です。しかし、丘陵部では北神ニュータウンの建設事業などの大規模な開発事業が実施され静かな田園地帯も近郊ベッドタウンとして大きく変貌しつつある地域です。

その一方、沖積平野の水田地帯では農業基盤整備に伴う土地改良事業が各所で実施され、それに伴う埋蔵文化財調査も行われ、新しい遺跡の発見が相続しています。ここに報告するオキダ古墳群もその一つです。

オキダ古墳群は、河岸段丘の水田開削によって削平を被った古墳で、試掘調査中不時に発見されたものです。

調査の結果、横穴式石室が発見され、多数の土器類と馬具一式が出土しました。馬具の出土は北摂地域では少なく、当地域の古墳時代後期の様相を解明する上で重要な資料を得ることができたと考えられます。

本書の刊行が、地域の歴史を理解するうえでお役にたてば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に深い御理解と惜みない御協力をいただいた関係各位に厚く感謝いたします。

昭和62年3月31日

神戸市教育委員会

教育長 山本治郎

## 例　　言

1. 本書は、神戸市日下部土地改良区が実施した、圃場整備事業に伴って実施した「オキダ古墳群」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、神戸市日下部土地改良区の委託を受け、神戸市教育委員会が実施した。
3. 今回の発掘調査は、神戸市北区道場町日下部423番地において、昭和58年1月8日から昭和58年3月18日まで実施した。
4. 発掘調査は、神戸市文化財専門委員の指導のもとに、以下の調査組織によって実施した。

### 調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

野地 脩左 神戸大学名誉教授

小林 行雄 京都大学名誉教授

檀上 重光 神戸市立博物館副館長

### 神戸市教育委員会事務局

教育長 山本 治郎

社会教育部長 太田 修治

文化財課長 八尾 明

埋蔵文化財係長 奥田 哲通

事務担当 学芸員 渡辺 伸行

調査担当 学芸員 西岡 巧次

5. 現地調査は、北区道場町口下部地区の地元有志の方々<sup>(注)</sup>に作業員として参加協力をいただいた。また、調査補助員として、武庫川女子大学学生大喜多知子、武庫川女子短期大学学生橋爪浩子、大阪芸術大学学生平川浩、大阪学院大学学生美除学の諸氏に参加協力をいただいた。
6. 本書の作成にあたって、出土遺物の復元作業は、整理員吉川京子、林美智子、大阪経済法科大学学生浜野俊一の各氏が行った。出土遺物の実測図作成、写真撮影は西岡巧次が行い、整図作業は、京都学園大学卒業生中井秀樹、神戸外国语大学学生西川史代、山本浩子の各氏と西岡が行った。
7. 本書の執筆・編集は西岡巧次が行った。

(注) 地元有志・横口謙、木下吉治、松尾邦雄、米田麻雄、藤寺康子、藤寺幸子、木元かづ子、井上笑了、樋口照子

## 目 次

	頁
I. はじめに	1
II. 歴史的環境	3
III. 調査概要	9
1. 各トレンチにおける調査	9
2. 石室の調査	13
3. 遺物の出土状態	16
IV. 出土遺物	18
1. 土器類	18
A. 玄室床面出土の土器	18
B. 墳丘裾出土の土器	20
C. 石室前庭部土壌出土の土器	20
D. 歴史時代の土器	22
2. 馬具類	24
3. 武器類	27
4. 利器類・その他	27
5. 鉄類	29
V. まとめ	30
1. オキダ2号墳出土の釘・鏡	30
2. オキダ2号墳出土の骨	31
3. オキダ2号墳出土の須恵器	32
4. 総括	36
VI. おわりに	39

## 図 版

- |       |            |       |             |
|-------|------------|-------|-------------|
| 図版 1. | 調査地遠景      | 図版 4. | 前庭部土壙土器出土状態 |
|       | 石室玄室部（北より） |       | 中世土壙墓       |
| 図版 2. | 石室狭道部      | 図版 5. | 出土土器（1）     |
|       | 石室前庭部      | 図版 6. | 出土土器（2）     |
| 図版 3. | 墳丘裾土器出土状態  | 図版 7. | 出土土器（3）     |
|       | 玄室床面鉄刀出土状態 | 図版 8. | 馬具類         |
|       |            | 図版 9. | 鉄器類・その他     |

## 写 真

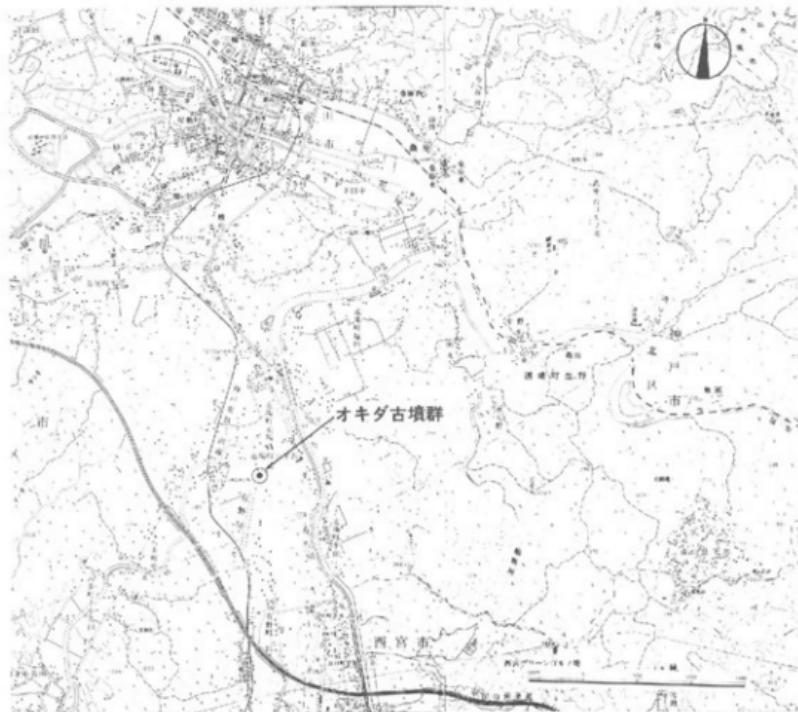
写真 1.	Fトレンチ遺構検出状況	10	写真 1.	石室検出状況	14
写真 1.	Gトレンチ上層遺構	11	写真 1.	遺物出土状況	16

## 挿 図

第 1 図	オキダ古墳群位置図	1	第11図	石室前庭部土壙出土須恵器	23
第 2 図	オキダ古墳群と周辺の 主要遺跡	5	第12図	包含層出土土器	23
第 3 図	中野駅北 4 号墳石室実測図	7	第13図	馬具実測図（1）	24
第 4 図	試掘トレンチ設定図	9	第14図	馬具実測図（2）	25
第 5 図	オキダ 2 号墳と周辺地形図	12	第15図	馬具実測図（3）	26
第 6 図	オキダ 2 号墳石室実測図	15	第16図	直刀実測図	26
第 7 図	玄室床面遺物出土状況図	17	第17図	金環実測図	28
第 8 図	床面出土須恵器	19	第18図	鉄器類実測図	28
第 9 図	床面出土土師器	20	第19図	鉄釘・鉄鎌実測図	29
第10図	墳丘裾出土須恵器	21	第20図	オキダ 2 号墳出土須恵器 編年試案	35

## I はじめに

**位置** オキダ古墳群は、神戸市の北部、神戸市北区道場町と有野町の境界線上に所在している。地籍では神戸市北区道場町日下部423番地にあたる。北区道場町では武庫川と有馬川・有野川・長尾川・八多川の諸河川が合流し、道場町塩田付近で比較的広い平野部を形成し、この平野部以外は、各河川沿いに狭隘な河谷平野がみられ、塩田盆地ともいるべき地域をかたちづくっている。オキダ古墳群は有野川の右岸に位置し、有野川と有馬川にはさまれた南北に展開する丘陵の裾が有野川に接する河岸段丘上に立地している。



第1図 オキダ古墳群位置図

### 古墳群の現状

オキダ古墳群は、神戸市教育委員会発行の『神戸市埋蔵文化財遺跡分布地図』(1973年発行)には「オキダ古墳」(B116)と記載され、その南部に古墳時代と中世の遺物散布地として「オキダ遺跡」(B280)と記載されているものにあたる。分布地図において「オキダ古墳」と称される地点は、雑木が繁茂するマウンドとして残り、マウンドの中央には地神が祀られている。社の中央に横穴式石室に用いられたと考えられる石材が散乱し、地元の人によれば鉄剣1振が出土したといわれる。また、調査中実施した周辺の分布調査の結果、「オキダ古墳」の東方を南北に展開する丘陵の西斜面に円墳1基を確認した。この円墳は径10.5m、高さ2.5mを測り、西南方向に開く舌状の既掘壙があり、既掘壙内に石材の露頭がみられる。横穴式石室を内部主体とする古墳(オキダ5号墳)であると考えられる。

このように「オキダ古墳」周辺には横穴式石室を内部主体とする古墳の分布が集中してみられ、水田化した段丘上にも開墾によって削平された古墳等が存在する可能性も予想できた。

### 調査の経過

したがって、日下部地区において土地改良事業が計画された段階で、特に施工区域の南端にあたる段丘部分においては本格的な調査が必要と考えられた。

調査は、土地改良事業施工部分約3haについて、任意に試掘壙12カ所を設定して調査を行った。

施工区域の南部に設定した試掘壙No.1・2においては土器細片を含む遺物包含層を確認したため、第6号支水路・第2号支水路予定地部分にトレンチを設定して調査を行った。また、施工区外にある「オキダ古墳」に接する水田に3カ所、試掘壙No.1を設定した水田北側の段丘崖に横穴式石室を用いたと推定される石材の露頭があり、石材の周囲と「オキダ古墳」に接して4カ所にトレンチを設定して調査を行った。

施工区域の北東部に設定した試掘壙No.6・7においては鎌倉時代後期の柱穴・遺物を検出した。この部分は昭和58年度施工部分であり、次年度に調査を持ち越すことになった。今回の調査は、南部の段丘部施工区域について、推定されるオキダ古墳群の確認と性格発明のため本格的な調査を実施した。

## II 歴史的環境

オキダ古墳群の所在する神戸市北区の北東部は、從来考古学的調査はあまり実施されていない地域である。1970年代後半以降、兵庫県が行っている北摂ニュータウン内での調査、<sup>1)</sup>西宮市の青石古墳の調査、<sup>2)</sup>及び神戸市の実施した藤原山団地造成に伴う発掘調査と埋蔵文化財分布調査などが考古学的資料として知られているにすぎなかった。

昭和54年北区長尾町、八多町の丘陵に北神ニュータウンの造成計画が出され、それに伴って造成区域と関連道路の発掘調査が実施され、現在も継続中である。その一方、土地改良事業に伴って段丘上及び沖積地における調査も実施され、弥生時代～中世にわたる遺跡が各所で検出されている。また、新修神戸市史の編集作業に伴って、遺跡分布地図のみなおし作業も進められ、より確実な遺跡分布の把握も可能な状況になりつつある。

以上の調査成果をふまえて主要遺跡について紹介し、オキダ古墳群をめぐる歴史的環境を概観しておきたい。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡は、長尾町宅原遺跡の北神中央線予定地で、縄文時代後期初頭の土器が出土している。また道場町塩田遺跡では縄文晚期の土器片、生野遺跡で縄文土器片が土地改良事業に伴う調査で出土している。他に、六甲北有料道路予定地内では多量の石器類と共に石器材片が出土している。しかしながら、縄文時代の造構が伴う遺跡の発見は皆無であり、今後の調査の進捗によって解明されるべき点の多い地域である。

**弥生時代** 長尾町の丘陵部北神第4地点遺跡で弥生時代中期後葉から後期にわたる竪穴住居址<sup>3)</sup>が検出されている。段丘部の下宅原遺跡で弥生時代後期の土壙<sup>4)</sup>が検出され、平野部の宅原遺跡内垣地区では、弥生時代後半の竪穴住居址<sup>5)</sup>3棟が確認されている。

道場町塩田遺跡では、土地改良事業に伴う調査で、竪穴住居址<sup>6)</sup>の存在が確認され、石包丁・石斧などの多量の石器類が出土している。塩田遺跡は弥生時代後期後半の土器も出土しており、弥生時代中期から後期に営まれた、自然堤防上の大集落であった可能性がある。

道場町塩田遺跡南所地区においても、弥生時代後期の竪穴住居址<sup>7)</sup>1棟が確認されている。

北区道場町周辺地域の弥生文化は、当初武庫川の支流長尾川・有野川・有馬川が生成する塩田盆地中央の自然堤防上に中期段階に集落を形成し始

める。中期後葉に至って、北神ニュータウン内の丘陵尾根上に高地性集落を出現させる。さらには、後期後半頃各支流域の河岸段丘上や自然堤防上に集落を形成し、集落数も増加する傾向がうかがえるのである。

**古墳時代  
集落遺跡** このように、弥生時代後期後半に分村化傾向を顕著にさせた集落は、長尾町下宅原遺跡では引き続き、古墳時代後期中葉まで集落を形成する。宅原遺跡は内垣地区の西方にあたる有井地区に古墳時代中期の集落が出現し、後期まで継続する。

古墳時代後期の集落は、前に述べた宅原遺跡有井地区・下宅原遺跡で確認されているにすぎない。しかしながら、武庫川右岸段丘上に位置する生野遺跡では6世紀中葉から6世紀後葉の須恵器が多数出土している。また、有野川右岸段丘上に位置する平田遺跡では6世紀後葉から7世紀初頭の須恵器が出土している。<sup>13)</sup>このように、遺構等の発見は少ないながら、土地改良事業に伴った調査において遺物の出土がみられ、各支流域の段丘上などで、古墳時代後期の集落が存在していることを示唆している。

以上、集落遺跡を重点に遺跡分布の概略をみてきた。

**古墳の分布** 一方、古墳の分布は大きくみて、以下の地域に集中してみられる。

- A. 有馬川・長尾川左岸（三田市境の東西にのびる丘陵）
- B. 武庫川左岸（国鉄道場駅北東側丘陵）
- C. 有馬川右岸丘陵
- D. 有野川左岸（北神ニュータウン内）
- E. 有野川右岸丘陵

ここでは、内容・性格の明らかな主要古墳について地域別に概述する。<sup>14)</sup>

**A. 有馬川・  
長尾川左岸** 三田市境となる丘陵尾根上及び南面する山麓に総数34基が存在する。

定塚古墳群は11基の木棺直葬を内部主体とする古墳群である。発掘調査を実施した2号墳は箱形木棺と割竹形木棺を内部主体とした一辺13.5mの方墳である。出土土器・共伴した土器棺の形態から弥生時代終末から古墳時代初頭の築造であり、北摂地域で最古の古墳と考えられる。

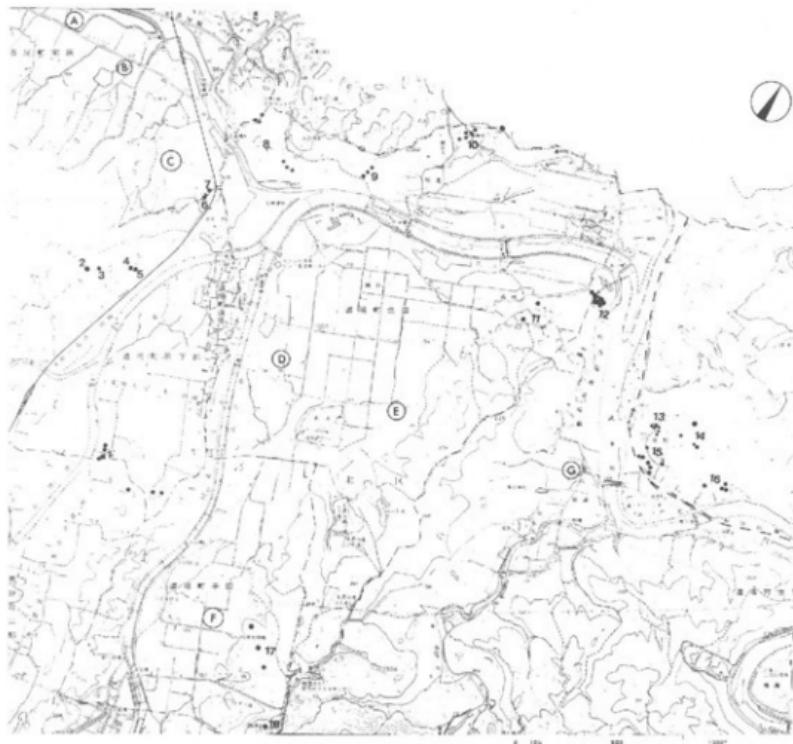
三田学園東隣の丘陵尾根上に位置する天皇山古墳群（4基）は径10m前後の円墳で構成される。内部主体については不明である。

長尾川が有馬川に合流する北側丘陵に川北古墳群3基、八景中学校南古墳群8基が存在する。いずれも、径10m～20mの規模を有する円墳で、横穴式石室を内部主体とする古墳群である。

八幡神社裏山古墳群7基は、盜掘を被り墳丘は判然としないが、1号墳は巨石を用い、奥壁を1石で構成する両袖式の横穴式石室を内部主体とし

ている。当地域で最も新しい形態の横穴式石室と考えられる。

- B. 武庫川左岸 国鉄道場駅周辺は、武庫川が蛇行しつつ三田盆地を流れ出る位置にあり、比較的広い沖積地と段丘の形成が右岸にみられ、西方の塩田盆地とは隔絶した小盆地を形成している。その対岸の丘陵の中腹に4支群20基の円墳群



- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1. オキダ古墳群    | 10. 八幡神社古墳群   |
| 2. 北神第13地点古墳 | 11. 南所古墳群     |
| 3. 北神第20地点古墳 | 12. 尼崎学園古墳群   |
| 4. 北神第9地点1号墳 | 13. 中野池上古墳群   |
| 5. 北神第9地点2号墳 | 14. 中野古墳群     |
| 6. 北神第3地点古墳  | 15. 中野駅北古墳群   |
| 7. 北神第2地点古墳  | 16. 中野道南古墳群   |
| 8. 八景中学校南古墳群 | 17. 稲荷神社裏山古墳群 |
| 9. 川北古墳群     | 18. ヨタノ池古墳    |
|              | A. 宅原遺跡       |
|              | B. 下宅原遺跡      |
|              | C. 北神第4地点遺跡   |
|              | D. 塩田遺跡南所地区   |
|              | E. 塩田遺跡平田地区   |
|              | F. 平田遺跡       |
|              | G. 生野遺跡       |

第2図 オキダ古墳群と周辺の主要遺跡

で形成される古墳群が所在する。このうち中野駅北4号墳は径19m前後の円墳で、残存状況の良好な横穴式石室を内部主体としている。石室内より平瓶が出土している。国鉄道場駅周辺の古墳群は出土したと伝えられる須恵器などから6世紀前半から7世紀初頭の古墳群と考えられる。<sup>17)</sup>

C. 有馬川右岸

武庫川に接する丘陵北端頂部に位置する尼崎学園古墳群6基は直径15m前後の円墳が近接して築造された古墳群である。内部主体はいずれも横穴式石室を用いたと推定される。その内の4号墳は石棚をもつ両袖式の横穴式石室である。出土遺物はなく時期等は不明である。

塩田盆地の南に展開する丘陵には南所古墳群2基が存在する。横穴式石室を内部主体とする円墳で、時期、性格等については不明である。

有馬川上流の右岸丘陵には、平田古墳群1基、稻荷神社裏山古墳群3基、ヨタノ池古墳群2基、青石古墳（西宮市）<sup>18)</sup>が存在する。いずれも、円墳で内部主体は横穴式石室を使用している。

D. 有野川左岸

有野川左岸の古墳群は、その大部分が北神ニュータウン第1団地造成地内に含まれる。

北神第9地点1号墳は、削竹形木棺を内部主体とする長方形墳で、出土土器の形態から4世紀～5世紀に築造されたと考えられる。<sup>19)</sup>

北神第2地点古墳は、全長30mを測る前方後円墳である。北摂地域で唯一の横穴式石室を内部主体とする前方後円墳である。<sup>20)</sup>

北神第13地点は竪穴式石室を内部主体とする円墳で、供獻用土器としてTK47型式の須恵器が出土している。<sup>21)</sup>

北神第9地点2号墳は、箱形木棺を内部主体とする直径16mの規模を有する円墳である。棺内より須恵器・管玉・土玉・鉄鎌・鉄鋤先が出土している。これらの遺物から6世紀前半に築造されたと考えられる。<sup>22)</sup>

北神第3地点・第20地点はいずれも横穴式石室を内部主体とする円墳である。発掘調査が実施された第20地点古墳は、出土須恵器から6世紀後半から7世紀初頭に造営されたと考えられる。<sup>23) 24)</sup>

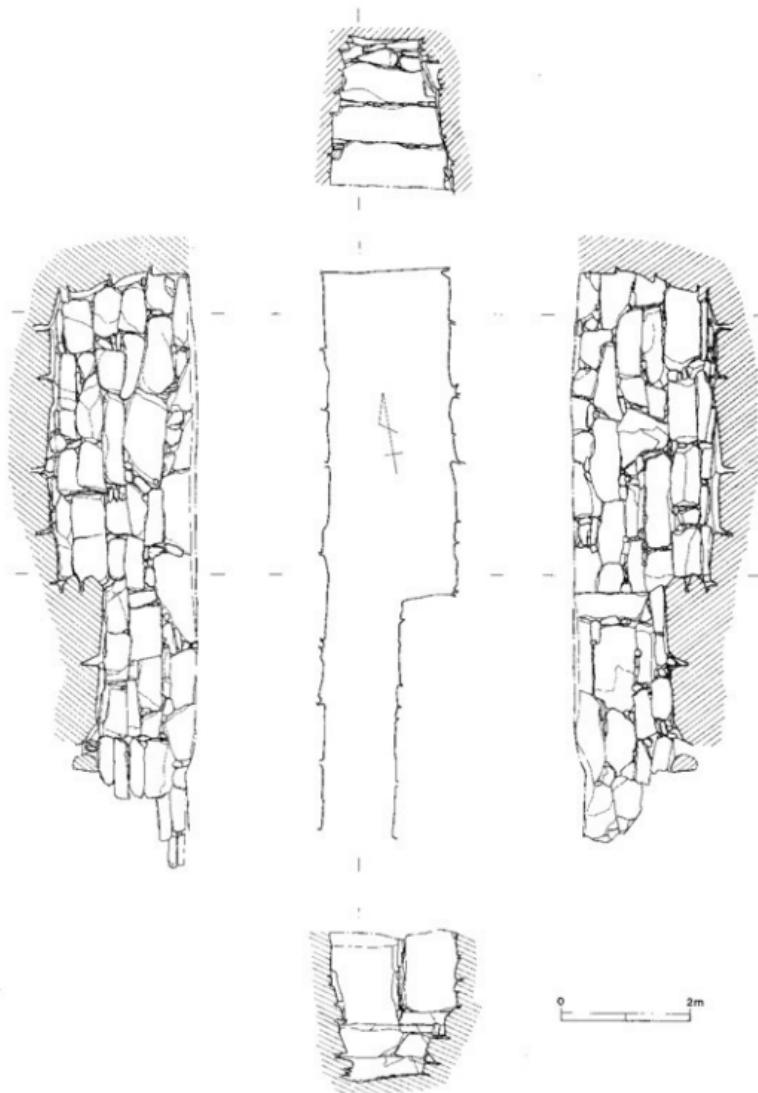
北神三団地内の古墳はいずれも塩田盆地を望むことのできる丘陵尾根上に立地し、4世紀～7世紀初頭の間、継起的に造墓活動を行った集団の墓域であったと考えられる。

E. 有野川右岸

オキダ古墳群の属する地域は、オキダ古墳群（推定5基）を認めるにすぎない。塩田盆地の南端に位置し、比較的ひろい河岸段丘と自然堤防が発達している点から、付近に古墳時代集落の存在も予想される地域である。<sup>25) 26)</sup>

歴史時代

歴史時代における当地域の状況を把握する資料は少ないが、宅原遺跡に



第3図 中野駅北4号墳石室実測図

において7世紀代と考えられる掘立柱建物や溝が検出されている。中でも岡下地区では「評」の墨書き器が出土していることから、従来不明であった有馬郡衙の有力な候補地の一つであると考えられる。また、道場町自彌地区では奈良時代前半の土器と、石組遺構が検出されている。<sup>29)</sup>

- 註 1) 兵庫県教育委員会「北神ニュータウン内遺跡調査報告」II 1983年
- 2) 西宮市教育委員会「青石古墳発掘調査報告」1974年
- 3) 神戸市立藤原地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査団 1971年調査
- 4) 神戸市教育委員会「神戸市埋蔵文化財造跡分布地図及び地名表」第1集 1973年3月
- 5) 神戸市教育委員会・神戸市スポーツ教育公社「北区の古墳(1)」神戸市史紀要「神戸の歴史」第15号 1986年2月
- 6) 神戸市教育委員会 1986年12月調査
- 7) 神戸市教育委員会 1981年3月調査
- 8) 神戸市教育委員会 1986年7月調査
- 9) 神戸市教育委員会「北神第4地点遺跡現地説明会資料」1984年
- 10) 丸山潔他「下宅原遺跡」昭和58年度神戸市埋蔵文化財調査年報 1986年
- 11) 神戸市教育委員会「北神中央隣建設に伴う埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料」1986年12月
- 12) 神戸市教育委員会 1984年調査
- 13) 口野博史「塙山遺跡」昭和58年度神戸市埋蔵文化財調査年報 1986年
- 14) 神戸市教育委員会 1986年10月調査
- 15) 註7) に同じ
- 16) 神戸市教育委員会 1984年調査
- 17) 古墳に関する記述は註記を行ったもの以外はすべて、註5) に依るところが大きい。
- 18) 註11) に同じ
- 19) 深保氏所蔵品を史見
- 20) 西宮市教育委員会「青石古墳発掘調査報告」1974年
- 21) 神戸市教育委員会「北神ニュータウン内第9地点1・2号墳現地説明会資料」1986年4月
- 22) 神戸市教育委員会 1985年測量調査
- 23) 宮本郁雄「北神ニュータウン内の古墳」神戸市史紀要「神戸の歴史」第12号 1985年7月
- 24) 註21) に同じ
- 25) 註22) に同じ
- 26) 註23) に同じ
- 27) 註11) に同じ
- 28) 神戸市教育委員会 1985年調査
- 29) 神戸市教育委員会 1978年調査

### III 調査概要

#### 1. 各トレンチにおける調査

- A・Bトレンチ 第6・2支水路予定地に設定したA・Bの各トレンチにおいては若干の土師器細片が出土しただけで、明確な遺構等は検出できなかった。
- C・Dトレンチ 段丘崖の石材露頭部の北に設定したC・Dの各トレンチでは、南から北におちる段落ちを確認した。南側のDトレンチでは、落ち込みの最下層の黒灰色粘質土から、古墳時代須恵器坏身片・土師器片が出土している。段落ちは古墳裾部と考えられる。
- Eトレンチ 段丘上に設定したEトレンチでは、床土直下で集石土壙4カ所、石列1カ所と溝を検出した。集石土壙は円形のもの3基、楕円形のもの1基である。円形の集石土壙は直径0.4mを測る。埋土は暗褐色砂質土で、土壙内に河原石と花崗岩の割石を充填している。埋土内からは、土師器の羽釜細片と須恵器片が出土している。楕円形の集石土壙は、長径1.2m、短径0.7mを測る。土壙内には、中央に横長の河原石を埋置し、土壙壁との間隙に河原石と花崗岩の割石を充填している。遺物の出土はない。



第4図 試掘トレンチ設定図(縮尺5000分の1)

石列は、東西3.6m、南北2.0m以上の梢円形の掘り方の南側に、0.5m～0.9m大の河原石がL字形に並んでいた。石列の内側は暗黄褐色砂質土で埋められている。

溝はトレンチの東辺で検出した。溝の幅は上部で1.6m、底部で1.0mのU字溝である。埋土上層で中世土器片が出土している。

Fトレンチ Eトレンチの南側にFトレンチを設定した。Fトレンチでは、溝2条と河原石を内部に含む梢円形土壤1基を確認した。

溝1は深さ0.18m、幅1.0mの浅い溝である。遺物の出土はない。溝2は深さ0.2m、幅1.6mの浅い溝である。遺物の出土はない。

梢円形土壤は、長径2.0m以上、短径2.0mを測り、中央に一段深く掘り凹められた部分がある。その一段深い部分に1m大の河原石が埋まり、掘り形との間隙にこぶし大の河原石を充填している。埋土内より、須恵器片、土師器片が出土している。



写真1 Fトレンチ  
遺構検出状況

Gトレンチ 土地改良事業予定地南端、「オキグ古墳」に接して設定したトレンチである。床上直下に土器を含む灰色砂質土がみられ、表上下0.5m前後で黄褐色粘質土の地山となる。この地山面を掘り込んで、歴史時代の土器を含む集石遺構5カ所、土壙墓1カ所、古墳時代の横穴式石室掘形を確認した。

集石遺構は、径0.7m～1.5m、深さ0.15m前後の浅く掘りくぼめた土壤に、こぶし大から0.8m前後の石材を埋め込んでいた。石材の間隙に歴史時代の土器片を含んでいる。これらの石材は河原石を破碎して用いたと考え



写真2 Gトレンチ上層遺構

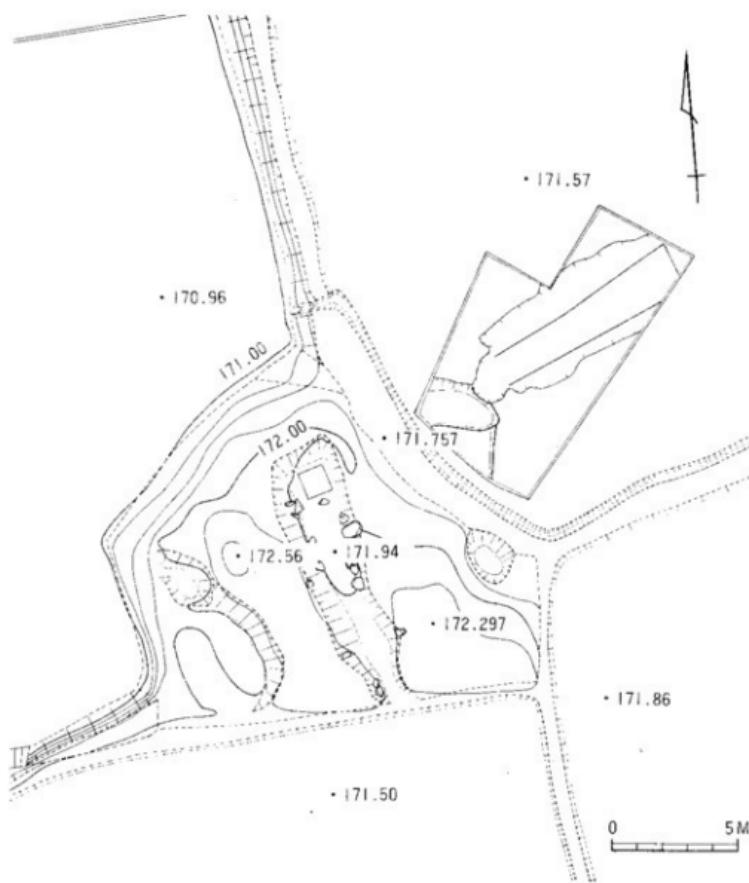
られ、横穴式石室破壊後の転用石材と考えられる。

土壙墓はトレンチの東部、古墳周溝と開口部の一部を掘り込んだ状態で検出した。土壙墓の規模は長さ1.45m、幅1.0mの長方形で、ほぼ東西に主軸をとっている。断面形はロート形に段掘りされている。段掘りされた下段は長さ1.2m、幅0.4mで長楕円形を呈する。深さは0.4mを測る。土壙の東部には0.6m大の河原石が落ち込み、中央部には0.15m大の河原石が落ち込んでいた。埋土内からの出土遺物はない。

トレンチ北東部から南西部にかけて暗灰色粘性砂質土を埋土とする落ち込みとして検出した。落ち込みの規模は幅3.5m、長さ8.5mを測る。落ち込みの北東端には長さ1m、幅0.5mの長方形の石材がたてられ、落ち込みの両側には破碎された石材が帶状に散乱し、中央部より南側では石室に用いられた石材が再度埋められた状態で検出された。埋土上面からは金環・鉄刀片が出土、さらに暗灰色粘性砂質土の薄く堆積した部分では石敷状の遺構が認められた。以上から落ち込みの北東端にたてられた石材は、石室の奥壁部に相当し、石敷を備える横穴式石室の側壁石が破壊されたものと推定され、帶状落ち込みはその掘方に相当するものと判断された。一方、トレンチ南西部を調査した結果、南西方向に傾斜する溝状遺構を検出し、石室の開口部と考えられる位置に径1.4m前後の土壙状の落ち込みを検出した。

## 調査概要

Hトレンチ Gトレンチにおいて石室掘形を検出したことから「オキダ古墳」と称されるマウンド状の高まりについて、地形測量を行った。さらにGトレンチ西側の水田にもマウンドに接してHトレンチを設定した。その結果、表土直下で地山となり、墳丘裾と考えられる痕跡は検出されなかった。



第5図 オキダ2号墳と周辺地形図

## 2. 石室の調査

オキダ2号墳の石室は、前節で概述したように、中世以降の削平、開墾によって破壊されていた。しかし墓壙と一部残存していた石材と石材の痕付け痕・床面の石敷の状態によって概ね石室の規模・形態を把握することができた。

石室はほぼ西南西に開口する無袖の横穴式石室である。石室は、地山である黄褐色粘質土を掘り込んだ石室掘形のほぼ中央に築かれ、全長8.5m、長軸の方位は磁北より $58^{\circ}30'$ 東にふれている。以下、繁雑さを避けるために、奥壁側を北とし、玄室から羨道に向かって左右をそれぞれ東西として、石室各部分について記述を進める。

**玄室**　開口部より両側石の痕跡が各3カ所ほど平行してみられ、石敷の始まる部分からやや「八」字状にひろがる点から、ほぼ石敷の施された範囲が玄室部であると推定される。

玄室の平面は、中央部から奥壁部にかけて整然とした長方形を呈し、東側壁は直線的に石敷が施されている。一方、西側壁は中央部から玄門部にむかって内側にすぼまる形になる。この結果、玄室の全体の平面形は台形状を呈する。玄室の長さは石敷の範囲から、中心部で5.45m、幅1.65m、玄門部で1.0mにすぼまる。奥壁は高さ0.3m、幅0.9m、奥行き0.5mの石材を石室中央から西隅に立てている。奥壁の東側は石材は見られないが、少なくとも2石以上の石材を用いていたと推定される。東側壁は原位置を保つ石材は検出されなかった。石敷と掘形の間隔は0.5m～0.85mを測り、ほぼ水平に地山を削り込んでいる。石材の据え付け痕跡は検出されず、裏込めの石材ないしは破壊された石材が、南部に散乱している。西側壁も原位置を保つ石材はなく、石敷と掘形の間隔0.9m前後の間に石材が帶状に散乱する。墓壙掘形は4カ所で弧を描くように外湾し、本来の石室基底石の位置を示すと考えられたが、石材の据え付け痕跡は確認できなかった。

玄室床面の石敷は当初、径0.1m～0.15m前後の扁平な河原石が全面に敷かれていた。その後、奥壁から玄門にむかって3.5mまでの範囲に0.2m～0.5m前後の河原石を敷き、石材との間隙は暗灰色砂質土を充填して埋めている。

また、玄門部には南北1.2m、東西14mの楕円形状に玄室奥部と同様に小砾を敷きつめている。石敷面は玄門部から奥壁に向かってやや下降してい

る。

**羨道** 羨道は石室の基底石が両側壁とも3石用いられていたことが、石材の据え付痕跡によって判明している。しかしながら、石材は全て抜き取られあるいは移動させられていて、原位置を保つものはない。羨道中央部は擾乱を被り、石敷、排水溝等の施設は確認できなかった。羨道の長さは2.5m、幅は羨門部で1.0mを測る。

**前庭部** 羨門部に接して東西1.3m、南北1.8m、深さ0.8mを測る楕円形状の土壙を検出した。土壙内からは、須恵器甕、高坏、蓋坏が出土した。石室の前庭部における墓前祭祀が執り行われたものと推定される。

**溝** 墳丘を画すると考えられる溝状遺構をトレンチ西南部で検出した。南西方向に向かってゆるやかに傾斜するU字溝である。幅1.8m、深さ0.2mを測る。溝内より須恵器が多量に出土している。

**石室掘形** 石室掘形は南北10.5m以上、東西3.5mの長方形の平面をもつ。残存する深さは0.1m前後を測る。墓壙は玄室・羨道とともに、ほぼ水平に掘られ、石室の基底石が据え付けられたと考えられる。



写真3 石室検出状況



第6図 オキダ2号墳石室実測図

### 3. 遺物の出土状態

遺物の出土位置は、大きくみて玄室床面上、前庭部土壙内、墳丘裾溝内に分けられる。さらに、玄室床面では玄室北東コーナー部と玄室床面中央、玄室東側壁沿い、西側壁沿いに集中して遺物が出土している。

以下、各出土位置ごとに出土状況を記述する。

#### 玄室北東部

須恵器坏身（1・2）、坏蓋（5・8・14）、ミニチュア広口壺（13）が正位置に据えられたように置かれていた。その須恵器坏身（1）の上に釘（3）、坏蓋（5）の上に釘（2）が置かれる。奥壁に接する土器群、東側壁に接するミニチュア広口壺（13）、坏蓋片（10）の間に釘（4）と鉄錠群がみられる。釘類が須恵器上、及び周囲にまとめて置かれている点から、玄室北東部でまとめて出土した遺物は、すべて第1次埋葬に伴うもので、第2次埋葬の際に移動させられたものと理解できる。

#### 玄室床面中央

玄室中央、南北1m、東西0.5mの小範囲に骨片と共にまとめて出土している。須恵器坏蓋（6・7・11）、土師器高坏（20・21）がすべて伏せた状態で出土している。また、玄室中央玄門部に近接して有蓋高坏の身部（18）が伏せられて脚部を欠いて出土している。これらは、二次的な移動を被つておらず、第2次埋葬に伴う供獻土器と考えられる。これらの土器群の北東0.5mに刀子1点が単独で出土している。1次・2次どちらの埋葬に伴う物か不明であるが棺内遺物の一部と考えられる。

#### 玄室東側壁沿い

東側壁に接して、切先を奥壁方向に向けて直刀1振が出土している。直刀の北側、側壁に直交して釘（2）、側壁より少し離れて鉄鋤先、不明鉄器類がある。



写真4 遺物出土状況

**玄室西側壁沿** 須恵坏身（3）、坏蓋（9）、高坏身部（16）、土師器破片と馬具類が出土している。馬具類は銹着しており、個体の別を明らかにできない状態で出土している。

**前庭部土壤内** 前庭部土壤内では、須恵器大甕が正位置の状態で据え置かれ、周囲に口頸部が散乱して出土している。他に高坏、坏身片など多数が出土している。また、土壤は溝状遺構を切って掘り込まれている。この前庭部土壤が古墳築造時期から、かなりの時間の経過した後に設けられたものと推定できる。

**溝内** 溝内の土器は、石室開口部側の溝肩に一括して出土している。

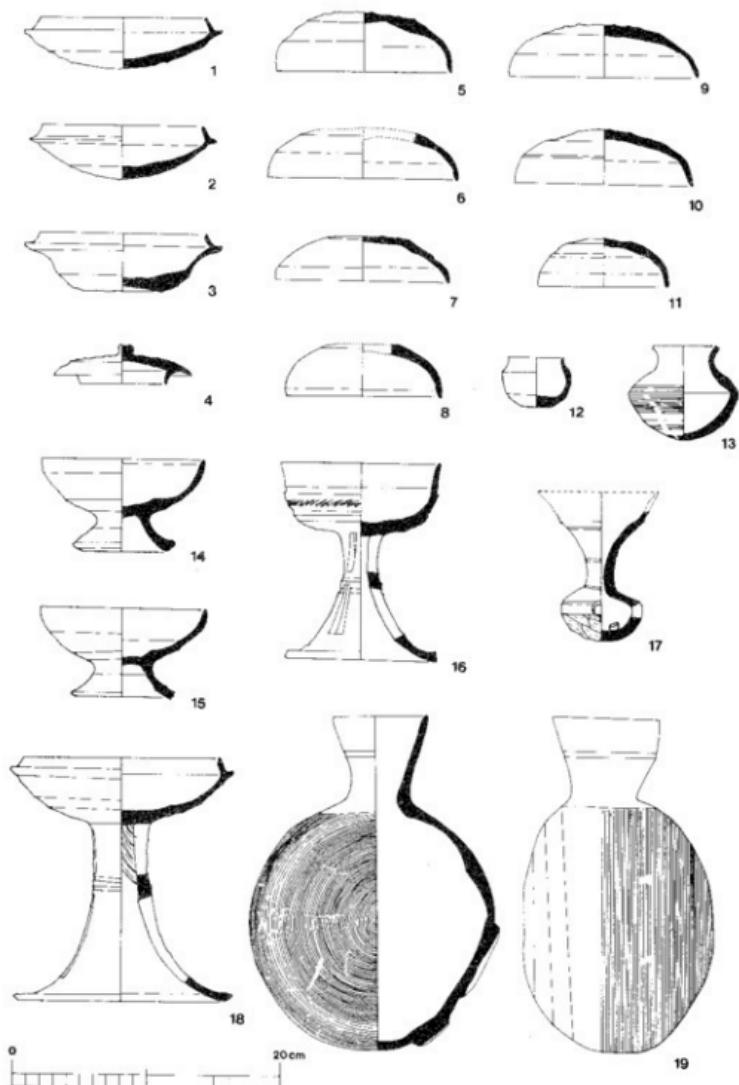


## IV 出土遺物

## 1. 土器類

## A. 玄室床面出土の土器 (第8図～第9図)

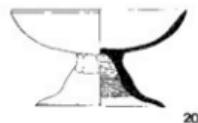
- 須恵器 坏身** 扁平な体部に内傾してたらあがる口縁部をもつもの（1・2）と、凹み（第8図）底の底部に外上方にひらく体部をもつもの（3）がある。いずれも底部のみを回転ヘラケズリして、他はロクロによるナデ調整を行う。
- 坏蓋** 坏蓋には全体を丸くつくり、天井部と体部の境を段のみによって画すタイプ（5・6・9）とやや浅い凹線で画すタイプ（10）と境が明瞭でないもの（7・8）がある。いずれも天井部のみを回転ヘラケズリによって切りはなし、他はロクロによるナデ調整を行う。
- 蓋** 蓋（11）は小形で、天井部と体部の境を凹線で画する。埴の蓋と考えられる。蓋（4）は台付長頭蓋の蓋と考えられ、内面に長く内傾するかえりをもつ。天井部には円筒状のつまみをつける。
- ミニチュア土器** 須恵器（12・13）はミニチュア土器である。埴を小型化したもの（12）、カキ目を体部に施す広口壺を小型化したもの（13）がある。
- 高坏** 高坏（14・15）は2点とも短脚の無蓋高坏で、やや外反する口縁部と外上方に脚端部をつまみあげる（14）とまるい体部にまっすぐたらあがる口縁部をつけるもの（15）がある。（16）は長脚無外高坏である。口縁部・体部・底部の境を凹線・稜によって画し、体部に櫛列点を施す。脚部は2段3方に長方形の透孔をもち、透孔間に2条の凹線を施す。（18）は長脚有外高坏で大型の偏平な坏身に大きく聞く脚をつける。脚端部はやや外上方につまみあげておさめる。透孔は2段4方に施し、透孔間は凹線をめぐらせる。脚基部内面にはしばり痕跡が明瞭である。
- 甌** 甌（17）は頸部を細くつくる。口縁端部を欠くが、口縁部は段をつけてラッパ状に開くと考えられる。口頸部中央・口頸部と体部の境には沈線がめぐる。体部は偏球形を呈し、肩部に沈線をめぐらし、底部は手持ちヘラケズリを行う。頸部内面にはしばり痕跡がみられる。体部内は円筒形の粘土塊がのこる。
- 提瓶** 提瓶（19）は、やや内湾する口頸部の中央に凹線をめぐらせる。口縁端



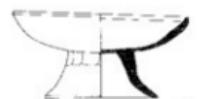
第8図 玄室床面出土須恵器

部は丸くおさめる。体部は前面にカキ目を施し、背面はヘラケズリによって、やや平坦につくる。

- 土師器 高坏** (20) は浅く、やや内湾する口縁をもつ坏部に、ラッパ状に開く短い脚を貼り付ける。接合部は指オサエによって調整する。坏部内外面は全体にナデ調整、脚部は外面ナデ調整、内面はヘラケズリとハケ調整を行う。(21) は(20) と同様な器形であるが脚のひらきは少ない。



20

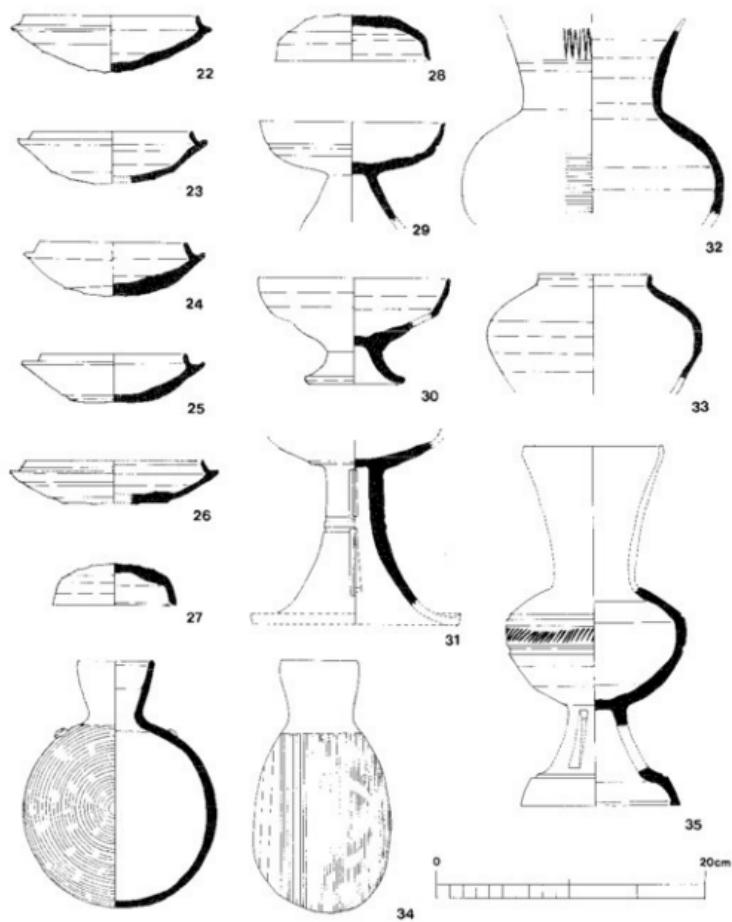


21

第9図 床面出土土師器

#### B. 墳丘裾出土の土器 (第10図)

- 須恵器** (23・24) は外上方にのびる受部に内傾する口縁部をつける。底部は丸くヘラケズリする。(27) はほぼ水平な受部に内傾する口縁部をつける。底部はひろくヘラケズリを行い尖り底状につくる。(25) は小型品で、受部は外上方につまみだして凹部をつくり、比較的短い内傾する口縁部をもつ。底部はヘラケズリして平底につくる。(26) は偏平平底の体部に内傾する口縁部をつける。
- 蓋** (27・28) は、いずれも小型品で天井部は平坦につくり、外下方にやや開く口縁部をもつ。口縁端部はわずかに外反し内傾面をもつ。
- 高坏** (29・30) は無蓋短脚の高坏である。(29) は比較的浅い体部にやや外反する口縁部をつけるである。体底部と口縁部の境は凹線で画する。脚は外下方に開く。(30) は比較的深い体部に内湾気味の口縁部をつける。脚台は短く、脚端部は面をもつ。(31) は長脚有蓋高坏の破片である。四方二段の透孔をもち、上下の透孔間に凹線が施される。
- 壺** (32) は広口壺の破片である。丸く肩部の明瞭でない胴部に外上方にひらく口頸部をつける。胸下半にカキ目を施し、頸部にヘラによる波状文を施す。(33) は壺である。胴部上方に明瞭な肩をもち、直角にたちあがる口頸部をつくる。胴部下半はヘラケズリを行う。(35) は台付長頸壺の破片で、口頸部と脚台の一部を欠く。胴部はやや上方に重心をおく偏球形で、肩部と胸下半を画するために2条の沈線を施す。その沈線間に柳描き列点紋を施す。脚部は一段3方の透孔が施される。
- 提瓶** (34) は、やや内湾する口頸部をもち、口縁端は丸くおさめる。肩部には円盤状の粘土塊をはりつける。体部前面はカキ目を施し、背面はヘラケズ



第10図 墳丘縄出土須恵器

りを行う。

### C. 石室前庭部土壌出土の土器（第11図）

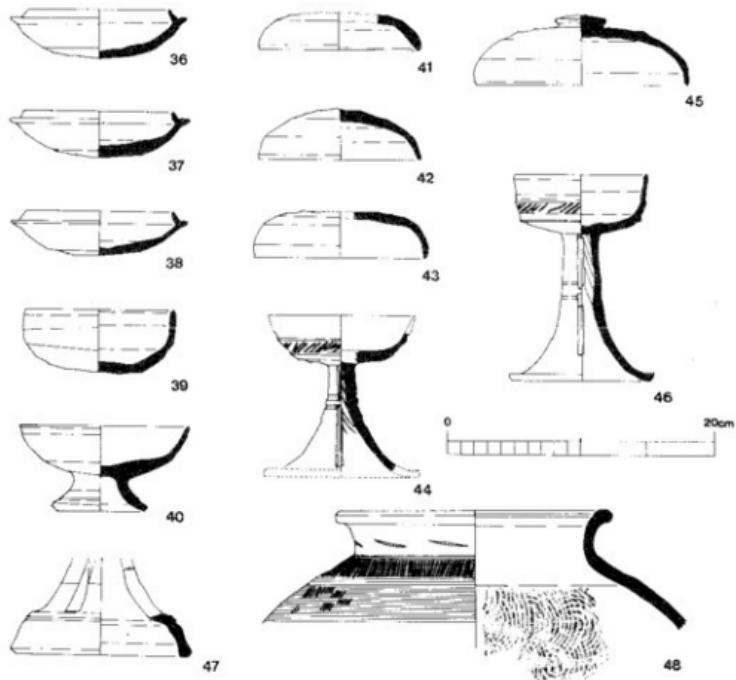
**須恵器**　环身（36・37・38）は、いずれも比較的小型品で、偏平な体部に断面三  
环身 角形状の短い口縁部をつける。ヘラケズリ調整は底部のみに用いる。

- 蓋　　坏蓋は、平坦な天井部をもつもの(41・43)、丸い天井部をもつもの(42)があり、いずれも口縁部と天井部の境が不明瞭である。(45)はツマミをもつ有蓋高坏の蓋である。丸くくる天井部は口縁部との境は明瞭でない。
- 高坏　　高坏(44・46)　いずれも長脚無蓋高坏で2段4方に透孔をもつ。坏部は底部と体部を段で削し、櫛描列点紋をめぐらせる。口縁部は外上方にたちあがるもの(44)と、まっすぐ上方にたちあがるもの(46)がある。脚部は、脚端部を外上方につまみあげて面をつくる。透孔間に凹線をめぐらせる。脚部内面はしおり痕跡が明瞭である。高坏(40)は無蓋短脚の高坏である。坏部はやや外反し、やや外上方につまみあげた脚端部をもつ。
- 塊　　(39)は深みのある塊である。口縁部はやや内湾気味にたちあがり、底部はひろくへラケズリして平底状につくる。
- 台付長頸壺　(47)は台付長頸壺の脚部片である。
- 甕　　甕(48)は口頸部の破片である。短く外上方にたちあがる口頸部に、外側に折り曲げて口縁部をつくる。口頸部中央に横向きの櫛描き列点紋を施す。体部丸く、外面にはたて方向の平行タタキを行ったあと、カキ目を施す。体部内面は青海波紋がみられる。

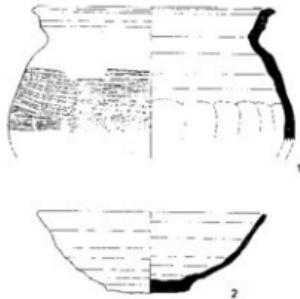
#### D. 歴史時代の土器（第12図）

石室検出面の上層に被覆する灰色粘質土層内から出土した土器である。土師器甕(1)は砂粒を含む荒くぶ厚い器壁で、球形に近い体部をもつ。口頸部は短く「く」字に屈折し、口縁端部は肥厚させる。須恵器塊(2)は円盤状の底部に内湾気味にたちあがる口縁部をもつ。底部は糸切りする。

須恵器塊の形態から平安時代後葉と考えられる。



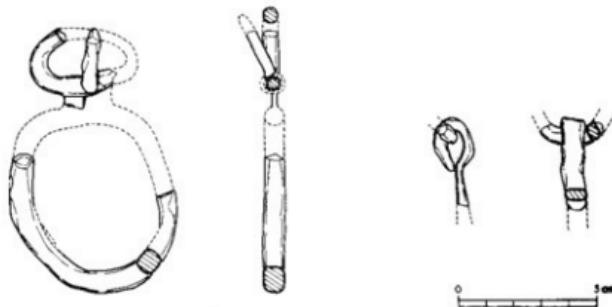
第11図 石室前庭部土壤出土須恵器



第12図 包含層出土土器

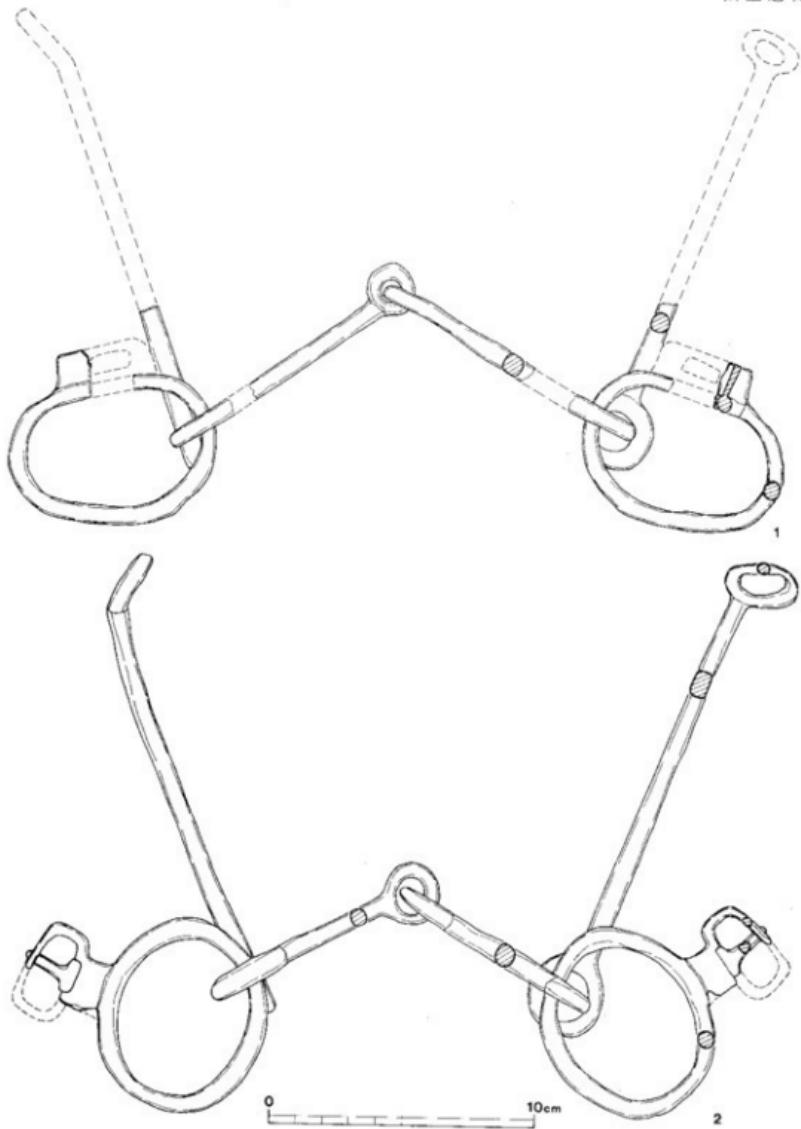
## 2. 馬具類（第13図～第15図）

- 轡（1） 鉄製素環鏡板付轡。鏡板と引手を銜の外側の環に掲げる。鏡板は、径0.6cmの鉄棒でつくった長径7.8cm、短径5.5cmの梢円形の環体に1cm×0.9cm以上の長方形立闇をつけたものである。立闇には方孔があくものと考えられるが欠損のため不明である。銜は二連式である。引手・銜は一部欠損しているため規格等は不明である。
- 轡（2） 鉄製素環鏡板付轡。轡（1）と同様に鏡板と引手と銜の外側の環に掲げる。鏡板は、径0.7cmの鉄棒でつくった長径7.3cm、短径6.6cmの梢円形の環体に、長さ3cm、ほぼ3.6cmの鉄具につくった立闇をつける。立闇基部は偏平で先に長方形の環部をつける。鉄具の刺金は基部中央にT字形刺金をはじめこんでつくりつけている。引手は全長19.8cm、断面は方形の鉄棒を使い、「く」字に折れ曲がった径2.8cmの引手壺をそなえる。銜は二連式で8.7cmを測り、外側の環がくくみの環より大きく、鉄棒自体もくくみ側に向かって細くなっている。
- 轡（3） 素環鏡板環体1と鉄具つくり立闇1、銜が遺存する。いずれも小片であり接合不能である。鉄具つくり立闇は復原推定長4.0cm、幅3.8cmを測る。

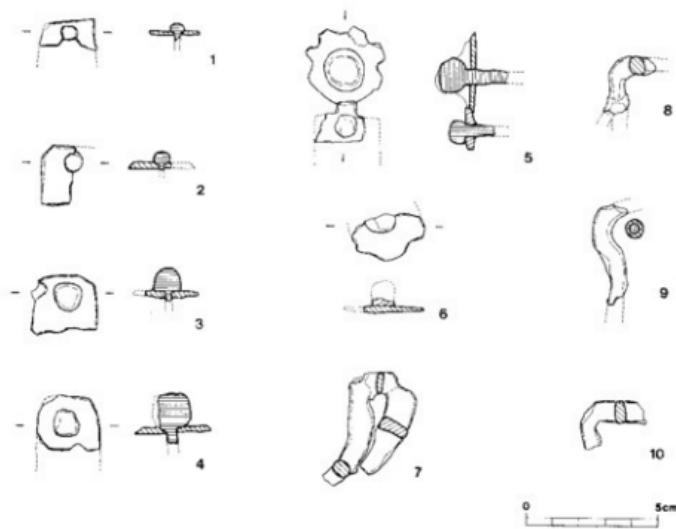


第13図 馬具実測図(1)

出土遺物



第14図 馬具実測図(2)



第15図 馬具実測図(3)

幅1.8cm、長さ0.6cmの比較的小さな基部に梢円形の環をとりつける。鉄具の刺金は棒状のもので、基部中央に搦めるものと推定される。

**革金具** いずれも、鉄地金銅張りで、頭部を金銅装した鉄製円頭紙を打つ。地板(第15図 1~5)の形態は角を切った長方形板に2釘を打ち込むもの(2・3)。地板が瓜形のもの(4)。飾金具の短辺に突起をつけて鍛接するもの(5)。地板長方形のもの(1)がある。裏面には皮革質は残存していない。

**飾金具** いずれも八花形の座金具に円頭紙がつく鉄地金銅装のものである。座金(5・6)具の径は3.1cmを測り、円頭紙の現状の長さ2.5cmを測る。座金具裏面には皮革質は遺存していない。

**その他** 鉄具の残片と考えられる破片(8・9・10)と鉄板を半月形に折り曲げて環状にしたもの(7)がある。



第16図 直刀実測図

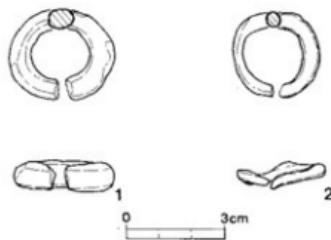
### 3. 武器類

- 直刀** 残存長69cm、切先先端と茎から刃部の一部を欠く。切先までを復原すると70cmになる。断面は二等辺三角形を呈し、鍔はもたず、ふくらみもない。  
 (第16図) 切先の近くでは刀身の幅2.2cm、厚さ0.5cm、刀身中央部で幅2.7cm、厚さ0.7cm、関近くで幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。刃と切先との境は甘い角を呈し、切先はややふくらみをもっている。他に木質を残す鉄刀片が出土している。
- 鉄鎌** (2) は鎌身の両側に刃をもつ長頭鎌である。切先近くの断面形は台形を呈する。推定長19.0cm、鎌身幅0.8cm、頭部幅0.7cm、茎幅先端で0.3cmを測る。  
 (第18図 1~4・7) (1) は(2)と同様に両側に刃をもつ長頭鎌である。頭部と鎌身の境に闊をつける。頭部と茎を画する段及び棘状突起はない。鎌身の断面は台形状を呈する。鎌身幅0.6cm、頭部幅中央で0.5cm、鎌身長1.8cm、全体の現存長13.0cmを測る。  
 (3) は、鎌身は三角形を呈し、鍔はなく薄いつくりである。先端は欠失している。鎌身幅は中央で2.0cmを測る。  
 (4) は、鎌身は柳葉型を呈する。闊は鈍角につくる。鎌身の先端の一部を欠失する。鎌身幅は中央で1.4cmを測る。  
 (7) は、柳葉型の鎌身をもち闊は甘く鈍角をなす。鎌身幅2.6cmで、頭部以下を欠き現存長3.0cmを測る。
- 刀子** 全長11cm、切先から3cmの部分で幅3cm、厚さ0.3cmを測る。両闊で棟の  
 (第18図 6) 部分では小さな段をなし、刃部では鈍角につくる。茎の幅0.6cm、厚さ0.25cm、長さ3.8cmを測る。

### 4. 利器類・その他 (第17図~第18図)

- 金環** 金環は2点出土しており、銅地金張りのいわゆる金環である。地金の銅  
 (第17図) は全て中実である。  
 (1) は、両端を丸く仕上げた楕円形 ( $0.6 \times 0.8$ cm) の銅地金を、長径3.2cm、短径2.8cmの「C」字形に曲げ、表面に金の薄板を貼りつけたものである。金箔は一部はがれたり、亀裂が生じたりしているものの、全体に遺存状態は良好である。  
 (2) は、両端を丸く仕上げた円形 (径0.4cm) の銅地金を、径2.6cmの

出土遺物

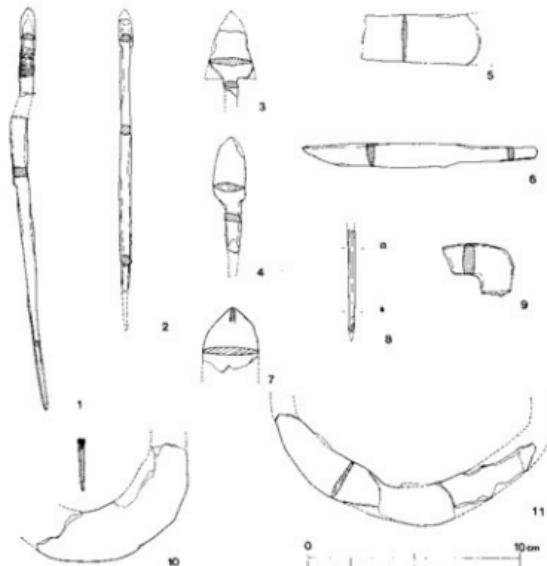


第17図 金環実測図

ほぼ円形に近い「C」字形に曲げてつくっている。銹化のために一部の金箔を残すのみで、緑青がふき出している。

鋤先 (10) はU字型の鋤先と考えられる。遺存状態は劣化している。刃部幅2.5cmでV字型の袋部をもつ。袋部には木質が遺存する。

鎌 (11) は、銹化がはげしく、残存状況も良好でない。切先、莖部を欠失させているが曲鎌と考えられる。刃部は薄くつくり幅2.0cm、厚さ0.4cmを測る。



第18図 鉄器類実測図

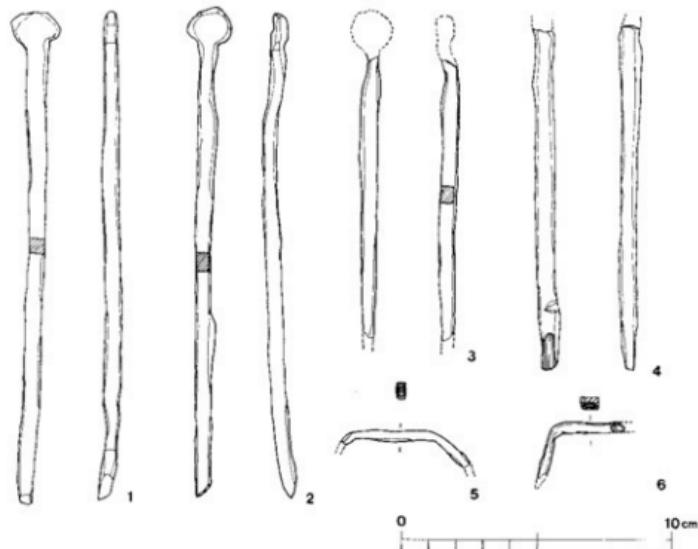
**針状鉄器** (8) は、断面方形の先細る極細の鉄棒である。先端を欠失しているが針状のものは鉄錐の基部と考えられる。現存長4.8cm、先端に近い部分で幅0.4cm、厚さ0.4cm、上部で幅0.5cm、厚さ0.4cmを測る。

**不明鉄片** (5) は刃をつけた鎌状のものと考えられるが、全形を推測することができない。(9) は厚手の鉄片を「L」形に曲げたもので用途不明である。

### 5. 釘類 (第19図)

**釘(1～4)** 全て断面方形の鍛造品である。頭部は軸部端をすこしえぐるように削し、円盤状の縦長に打ち出されている。頭部の長さ1.0cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、軸部の厚さ0.7cm、全長は完形の(1・2)で平均18cm前後のものである。(4)には縦方向の木質の付着がみられる。

**鎌** (5・6) はいずれも木心鉄張で、断面形は矩形を呈し、「く」字に折れ曲がる。脚の部分は欠失する。



第19図 鉄釘・鉄鎌実測図

## V まとめ

今回の調査では、水田化した段丘上に 3 基もの横穴式石室が存在していたことを確認した。そのうちの 1 基には、削平を被っていたにもかかわらず、多量の副葬品が遺存していた。本章では、出土遺物を中心にしてオキダ 2 号墳の埋葬形態と築造時期の検討を試みたい。そして、周辺に所在する古墳の検討によって、当地域におけるオキダ 2 号墳の歴史的位置付けについても述べてみたい。

## 1. オキダ 2 号墳出土の釘・鍵

オキダ 2 号墳から出土した鉄釘・鉄鍵は計 6 点であり、これらは二次的な移動を受けて石室の奥壁近くに一括して埋納されていた。このため、出土状態から、釘・鍵を用いた木棺の規格・配置状況等を知ることはできなかった。しかし、左奥壁部に一括して埋納されている点から、古墳築造当初の第 1 次埋葬に伴う可能性があると推測できた。その年代は、周辺に散乱する須恵器の形態から、6 世紀後葉の頃とみて大過ないと考えられた。ここでは、出土した鉄釘・鉄鍵の分析と他の諸古墳の出土例を通して、使用された木棺について検討してみたい。

まず、本古墳出土の鉄釘の頭の形態は、頭部を山形に打ちのぼしたタイプで、田中彩太氏の分類によれば B 3 類に相当する。その法量は、全長が 18cm 前後のもの（1・2）、13cm 前後と推定されるもの（3）がある。断面は 6 ~ 8 mm の方形を呈している。全体に比較的大型品と考えられる。以上に略述した形態の鉄釘は奈良県石光山 27 号墳・6 号墳<sup>31)</sup>の木棺直葬墓出土の鉄釘に類似がみられる。両古墳とも年代について確証がないが、報告においては 6 世紀中葉を前後する時期があたえられている。

一方、鉄鍵は「く」字に折れ曲げた脚が直線的にのびるタイプである。こういった鉄鍵の類似例には、滋賀県福王寺 6 号墳出土例がある。福王寺 6 号墳は横穴式石室を内部主体とする円墳である。その時期は、明確ではないが出土須恵器から、6 世紀前半に築造され 6 世紀後葉まで追善・追葬が行われたと考えられる古墳である。

以上の諸例から、オキダ 2 号墳出土の釘類は、法量の大型化、釘・鍵の併用、釘 B 類の盛行という田中彩太氏が提唱する II 期（6 世紀前半～後半）

に位置付けることができる。

このII期とされる釘・鍵を緊結金具として用いた木棺は、一般にぶ厚い棺材を用い、蓋板は上から鉄釘で固定するのに無理がある構造あるいは緊結金具を必要としない構造が推定されている。形状としては、蒲鉾形の蓋が想定され、従来の組合せ式木棺、組合せ式石棺の構造に近いものと考えられている。<sup>34)</sup>これらから、オキダ2号墳においても古墳建築当初の第1次埋葬において大型の棺材を用いた組合せ式木棺が用いられた可能性が推察される。

## 2. オキダ2号墳出土の轡

オキダ2号墳から出土した轡は、形状を復原できるもの2組、立聞の形状から他の2組と分離できると考えられる環状鏡板1点の存在から、計3組が確認できる。この3組の素環鏡板付轡はいずれも、石室の右側壁沿いに他の馬具類と共に一括して出土しているが、追葬等による二次的な移動が考えられ、いつ、どの轡が副葬されたかについては出土位置からは不明である。

まず、轡(1)は長方形立聞鏡板で、立聞孔はおそらく環体からは分離するタイプと推定される。衡と引手の形態は衡の端環に引手を直接結合させる。花谷分類の引手・衡結合式長方形立聞 b類素環鏡板付轡に相当する。岡山県岩山14号墳、京都府湯舟坂2号墳出土七例などがその好例である。

轡(2)は、鉄具造り立聞鏡板で、T字形の刺金をもつ鉄具をとりつけたものである。衡と引手は轡(1)と同様の形態で結合する。引手・衡結合式鉄具造り a類素環鏡板付轡と呼ばれる轡である。同種の轡は和歌山県鳴滝1号墳出土例、島根県上島古墳出土例がある。

轡(3)は、立聞にあけた孔に棒状の刺金を搦める鉄具を立聞としている。鉄具の環部と鏡板の環体がはなれるタイプのもので、鉄具造り b1類素環鏡板付轡と考えられる。立聞と環体・衡の一部が分離して出土し、引手部が消失しているため衡・引手の結合方式については不明である。一般に鉄具造り立聞素環鏡板付轡は、すべて二連式衡、単条線引手、引手・衡結合式に統一される傾向が認められる。このような点から、轡(3)も引手・衡結合式であった可能性が強い。

以上、オキダ2号墳出土の轡について、型式分類にそって概述した。以

下、これらの轡について、その編年的位置付けを行う。

轡（1）の長方形立間b 1類素環鏡板付轡は立間が低く、ぶ厚くつくられている点から、長方形立間b 1類でも古く位置付けられる。一般に引手・銜結合式の轡は6世紀中葉に現われ、そのうち長方形立間b類は6世紀後葉以後のものと考えられている点から、轡（1）は6世紀後葉を降らないものとすることができる。

轡（2）は、上島古墳堅穴式石室内出土例、鳴滝1号墳出土例に類例がある。上島古墳では家形石棺直葬を主体部とし、堅穴式石室は同時に付設された副葬品埋納壙と考えられている。したがって、石棺内出土の須恵器の年代が6世紀中葉を前後する点から、轡も6世紀中葉に位置付けられる。鳴滝1号墳は、出土須恵器が6世紀中葉から後葉と考えられる。これらの類例から、6世紀後半段階には鉢具造りa類轡は出現していたものと考えられる。したがって、轡（2）は6世紀後半に比定できる。

轡（3）は、鉢具造りa類立間を簡略化した型式と考えられる鉢具造りb 1類立間を用いている。鉢具造りb 1類立間は鉢具造りa類に後続するものと考えられる点から、轡（3）は6世紀末葉～7世紀初頭に比定できる。

以上、オキダ2号墳出土の轡について概括的な検討を加えた。さきにも述べたように、轡の出土状況から追葬等による二次的な移動があったことが考慮されるが、轡の型式把握により、副葬時期は以下の順序による埋納が想定される。

3組の轡が一括して埋納された場合、型式的に古相と考えられる轡（2）が第1次埋葬、型式的に共存する可能性の高い轡（1）と轡（3）が第2次埋葬に供される場合が考えられる。

### 3. オキダ2号墳出土の須恵器

オキダ2号墳出土の須恵器は、すでに述べたように、玄室床面から出土したものと、前庭部土壌内、墳丘裾溝内出土のものにわけられる。そして、これらの須恵器をこれまでの須恵器編年によれば、前庭部土壌内から出土した一群の須恵器の中に塊（39）が含まれている点から、玄室床面から狭門部にむかうにしたがって出土須恵器が新しい様相をもつものが多いことが読みとれる。

出土状況 玄室床面における出土状況は、奥壁左隅で集中する傾向がみられるもの

の、全体に括した状況で出土したものではなく少くなく必ず追葬時における二次的移動を被っているものと考えられる。したがって、出土位置によって時期差を表現しているとは考えられない。墳丘裾溝内出土の須恵器は、もとより石室内から追葬等の際にかき出されたものと考えられ、原位置を保つものではない。一方、前庭部土壇内出土の須恵器は、オキダ2号墳における最終埋葬に伴う、葬送儀礼ないしは追善儀礼に用いられたものと考えられる。したがって、オキダ2号墳の使用時期の下限を示すものと考えられる。

これらの出土状況から、玄室床面、墳丘裾溝内出土の須恵器については型式学的方法によって分類し、最も新しい一群と考えられる前庭部土壇出土の須恵器と比較検討を試みることによって編年作業を行う。

#### 出土須恵器の

##### 類型化

坏身はおおむね4類型に細分することができる。まず1類は比較的大型品で、たちあがりが高く、ほぼ水平に受部をつける。底部は尖底気味である。(1・2・22) 2類は1類と同じく大型品で深い体部をもち、凹む底部をもつ。(3) 3類は偏平な体部に外上方にのびる受部をつける。底部は平底につくる。(26) 4類は、小型品で、丸い浅い体部に外上方につまみあげる受部と短いたちあがりをもつ(23・24・25・36・37・38)がある。

1類の出土位置は、玄室床面・墳丘裾に限られる。4類の出土位置は、前庭部土壇と墳丘裾に限られる。したがって、1類・4類の間には、埋葬時期もしくは葬送儀礼における用いられ方に違いがあったと推定できる。しかし、須恵器坏身の一一般的傾向として口径の小型化、たちあがりの矮小化、調整の粗雑化が新しい傾向と考えられる点から、1類から4類への編年的序列が考慮できる。一方、2類・3類の坏身については、依然口縁部のたちあがりが高く、比較的大型品であること、出土位置が玄室床面・墳丘裾であるなどの点から、1類の時期に属するものと考えたい。これらの特異な形態の坏身については、本古墳の一般的な坏身との生産地の違いが想定できる。なお、出土点数が1点であることから搬入品である可能性もうかがえる。

したがって、オキダ2号墳出土の須恵器坏身は1・2・3類と4類という2型式期の設定が可能と考えられる。

蓋はおおむね5類型に細分することができる。1類は比較的大型品で、天井部と体部の境を沈線によって画するもの(10), 2類は1類同様の大型品で、天井部と体部の境を段によって画するもの(5・6・9), 3類は小型品で天井部と体部の境に段がやや下にあるもの(7・23・42), 4類は天

井部と体部の境に段がないもの（8・41・43），5類は口径が小さく壺の蓋と考えられるもの（11・27）がある。

1類・2類の出土位置は玄室床面に限定される。3類・4類は玄室床面・前庭部土壙で出土している。これらから、蓋1類・2類は壺身1～3類に、蓋3・4類はほぼ壺身4類に付属するものと推定できる。

短脚無蓋高壺は3類型に細分することができる。1類は壺部に沈線をめぐらせるもの（29），2類は丸く内湾する壺部に、脚端部を外上方につまんで端面をもつもの（14・15），3類は外上方に直線的にのびる壺部に、脚端部を単純におさめるもの（30・40）がある。

1類は蓋1類に共通する製作技法をもち、最も古い傾向のものと考えられる。2類の（14）は壺部の口縁端部が内傾し、これは壺1類の口縁端部に共通する。出土位置では、1類・2類が玄室床面・墳丘裾で出土し、3類は墳丘裾と前庭部土壙で出土している。したがって、1・2類を古い様相をもつものと考え、3類を新しい傾向のものと考える。

長脚無蓋高壺のうち、玄室床面出土の（16）は基部も太く、2段3方透しであるのに対して、前庭部土壙で出土した（44・46）は基部も細く、2段の透しを画する凹線も不明瞭である。したがって、（16）は古い様相をもち、（44・46）は新しい様相をもつものと考えられる。

長脚有蓋高壺（18）は、玄室床面中央部から出土しており、これに付属すると考えられる蓋（40）は前庭部土壙から出土している。新しい類型に含まれるものと考えられる。

提瓶（19・34）は、両個体とも口縁部に折りかえしをつけず、丸みをおびた側面形をもつ点から新しい傾向のものと考えられるが、壺身・壺蓋等における新古どちらの類型に属するものか不明である。

台付長頸壺（35）とこれに付属すると考えられる蓋（4）は、類似する脚部片（47）が前庭部土壙内より出土している点から、新しい類型に含まれるものと考えられる。

甕（17）は、底部を手持ちヘラケズリする点で新しい類型に属するものと考えられる。

以上のように、オキダ2号墳出土の須恵器は新古の2型式に細分できる。短頸壺、広口壺、提瓶、台付長頸壺などの出土個体数の少ない器種については、なお検討の余地を残している。

編年における  
位置付け

次にオキダ2号墳出土須恵器を從来の須恵器編年の中に位置付けたい。

まず、「世界考古学大系」の編年によれば、オキダ2号墳の須恵器は海北

め  
上  
水

出土位置	石室床面	塙丘櫛	石室前庭部土壤
I			

II

I

第20図 オキダ2号塙出土須恵器編年試案

塚式から桃谷式にわたるものと考えられる。他の体部がやや偏平であること、台付長頸壺の脚が比較的高く、透孔が1段であることから、出土須恵器の上限を海北塚式の中でも新しい段階のものと比定することができる。田辺昭三による編年では、この時期に関するあまり十分な資料の提示がないため不明確であるが、TK43型式～TK21型式に位置付けることが可能であろう。中村浩による編年では、蓋壺以外の器種について提示されている資料と本古墳出土資料との間に共通する器種に乏しい。しかし、蓋壺に関してはおおむねII型式の第3段階からII型式の第6段階に相当するものと考えられる。すなわち、蓋1類がII型式の第3段階、壺1・2・3類と蓋2類がII型式の第4段階、壺4類と蓋3・4類がII型式の第5段階、そして壺(39)がII型式の第6段階に相当するものと考えられる。

## 絶対年代

最後に、オキダ2号墳出土須恵器の絶対年代について検討してみたい。この時期における須恵器の絶対年代を決定するうえで重要な資料には、飛鳥寺創建前の土層中から検出された須恵器片がある。飛鳥寺は崇峻天皇元年(西暦588年)に造営を始めたと記されている。これに従えば、創建前の土層中検出の須恵器片は西暦588年を降らうことになる。この飛鳥寺下層の須恵器のうち、壺蓋は天井部と体部の境に凹線や稜がなく、段のみによって画される。本古墳出土須恵器においては蓋2類に相当するものである。したがって、前に細分して2型式期に分けた土器群のうち、古い様相をもつ土器群は6世紀中葉もしくは後葉として位置付けられる。一方、新しい様相の土器群は7世紀前後とすることができる。

## 4. 総括

オキダ古墳群は、三田盆地南部神戸市道場町を中心とする盆地の南端、段丘上に営まれた総数5基以上と推定される群集墳である。今回、調査を実施した2号墳は、無袖式の横穴式石室を内部主体としている。石室は、玄室床面の石敷が2回にわたり施され、出土須恵器の形態も2型式期に分けられる。これらの調査結果から、2号墳は6世紀は後半から7世紀前半までに少なくとも2度にわたる埋葬が行われたと推定される。

出土遺物のうち、馬具は轡3個体、鍍金飾金具、銅鏡などが出土しており、ほぼ乗馬に必要な馬具一式を備えていたものと考えられる。馬具を出土した周辺の古墳には三田市宮脇13号墳(轡)<sup>50)</sup>、中西山3号墳(金銅装飾金具・銅鏡)<sup>51)</sup>などがあるが、三田盆地南部(神戸市域)では最初の出土

である。また、雲珠、杏葉、辻金具を欠くものの、型式の異なる轡3個体の出土は、馬具資料として貴重といえる。また、当初遺体の埋葬に用いられたと考えられる釘・鍵が出土している。その釘・鍵の型式から復原される木棺は、大型の組合せ式木棺に近い形態のものを使用していた可能性があることを想定した。このように、旧来の大木棺を用い、副葬品に鍍金飾金具を含む馬具一式を保持したオキダ2号墳被葬者とは如何なるものであったか、その歴史的位置付けを、周辺古墳と集落遺跡のあり方の中で検討し総括としたい。

三田盆地南部では、歴史的環境の項で述べたように、6世紀前半段階まで、長尾川左岸、有野川左岸の丘陵上に木棺直葬あるいは堅穴式石室を内部主体とする古墳が集中的に造営される。長尾川左岸の定塚古墳群、有野川左岸の北神ニュータウン第9地点1号墳・第13地点古墳・第9地点2号墳がこれにあたる。そのうち北神ニュータウン内の古墳は、第9地点1号墳→第13地点古墳→第9地点2号墳→第3地点古墳・第2地点古墳→第20地点古墳と古墳築造が継続される。これらの古墳は、内部主体を木棺直葬・堅穴式石室から横穴式石室へと変化させつつ、4世紀から7世紀にわたる繼起的な造墓活動の所産と考えられる。また、その内に前方後円墳（第3地点古墳）を造営していることからして、一系的な造墓とともに、これらの造墓集団が他を卓越した地域内での地位を確立していたことが想定できる。

一方、三田盆地南部の集落遺跡は、弥生時代終末期にほぼ地域内全域に分村化を果たしている。しかしながら、継続して古墳時代前・中期まで営住した集落は下宅原遺跡・宅原遺跡（有井地区）において確認されているにすぎない。このように、未調査の集落遺跡が多い中ではあるが、古墳時代前・中期における集落が長尾川流域に集中する現象が、先に述べた長尾川左岸・有野川右岸における古墳群の成立事情に相応するかは、今後の問題となるであろう。

6世紀前半以後、三田盆地南部の当地域においては横穴式石室を内部主体とする古墳が出現すると考えられる。発掘調査を実施していないため、詳細は明らかではないが北神ニュータウン内第2地点古墳・第3地点古墳が当地域における最も初期の横穴式石室を内部主体とする古墳と推定される。

北神ニュータウン内の古墳のうち、第2・第3・第20地点の古墳が昭和6年に盗掘され、それらの遺物が明らかになっている。遺物個々の出土古

墳は特定できないが、陶邑TK10型式～TK217型式の須恵器が含まれている。そのうち、20地点古墳はTK217型式の須恵器が発掘調査で出土しており、盗掘によって出土した須恵器のうち第2・第3地点古墳出土の須恵器の時期幅はTK10型式～TK209までと考えられる。したがって、第2・第3地点古墳のいずれかがTK10型式期、6世紀前半まで遡りうるものと考えられる。

この北神ニュータウン内第2・第3地点古墳の出現以後、長尾川流域以外にも集落の形成が始められる。生野遺跡、塩田遺跡、平田遺跡など、遺構の検出はないものの、6世紀から7世紀にかけての遺物の出土地がある。これらから、塩田盆地の縁辺にひろがる段丘上に各所に集落が営まれたであろうと推定される。これらの古墳時代集落に対応して、背後丘陵乃至は段丘上に古墳群が形成され始める。生野遺跡に対する広義の中野古墳群、平田遺跡に対する稻荷神社裏山古墳群、がその例であり、オキダ古墳群もその一つと考えられる。これらの古墳群はすべて横穴式石室を内部主体とする可能性が高く、数基を1単位とし、近接する1集落を基盤にして形成された古墳群といった様相を示している。

以上、三山盆地南部における古墳文化の展開過程について、若干の検討を試みた。当地域の古墳文化は長尾川流域・有野川左岸に出現し、特に有野川左岸丘陵上にほぼ古墳時代全期間にわたる一連的な造墓活動を展開した首長の存在が想定される。そして、有野川左岸の首長は、古墳時代後期になると前方後円墳の築造・横穴式石室の採用など、三山盆地南部において常に主導的な役割を果たした有力氏族と考えられる。他方、オキダ古墳群の存在する塩田盆地中央部では、数基単位の横穴式石室を内部主体とする円墳群がみられる。時期は6世紀前葉以後と考えられる。このような古墳文化の展開の中で、オキダ古墳群の被葬者は、有野川左岸の首長と、どのような関係の下に古墳群を成立させたのであろうか。6世紀中葉以後、有野川左岸の古墳群は、第20地点古墳にみられるように小規模な石室を構築し、弱体化する。これに対して他方の武庫川左岸の中野古墳群、有馬川左岸の八幡神社古墳群などで比較的大規模な横穴式石室が構築される。また、オキダ2号墳にみると、馬具一式を備え、大型の木棺を用いる横穴式石室墳の構造など、有野川左岸の古墳群を凌駕する内容を持つに至る。こういった当地域の古墳時代後期の動向を今後他の諸古墳と古墳時代の集落遺跡における調査を待って、総合的に究明していく必要があると考える。

## VI おわりに

今回のオキダ古墳群の調査は、土地改良事業に伴う調査であり、2号墳の石室床面の検出後、事業主体者である神戸市日下部土地改良区、神戸市農政局との間で古墳群の取り扱いについて協議した結果、盛り土等により現状変更を最小限に留める設計変更を行うことに合意した。このため検出した石室床面のみを精査し、2号墳の墳丘調査、3・4号墳の内部精査は実施しなかった。したがってオキダ古墳群の全貌を明らかにすることはできなかつたが、石室検出と馬具一式を初めてとする多量の遺物が出土したことによって、北神ニュータウン内以外の三山盆地南部地域の後期古墳の一端を明らかにすることができた。この調査記録が、今後当地域の歴史を考え、明らかにしてゆくための一助となれば幸いである。

最後に、埋蔵文化財調査に理解を示され、オキダ古墳群の現状保存に協力を頂いた神戸市日下部土地改良区と神戸市農政局に対して深甚なる謝意を表する次第である。

- 註 30) 田中彩太「古墳時代木棺に用いられた繩結金具」考古学研究第25巻第2号 1978年9月
- 31) 白石太一郎他「藝城・石光山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊 1976年
- 32) 丸山竜平他「福王子古墳群発掘調査報告」『滋賀県文化財調査報告書』第4冊 1969年
- 33) 30) 田中論文に同じ
- 34) 30) 田中論文に同じ
- 35) 花谷 清「馬具」「湯舟坂2号墳」久美浜町教育委員会 1983年
- 36) 神原英朗「岩田古墳群」「岡山県山陽新田市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査概報」第6集 1976年
- 37) 奥村清一郎他「湯舟坂2号墳」久美浜町教育委員会 1983年
- 38) 橋口隆康・近藤喬一・吉本雅俊「和歌山市鳴滝古墳群の調査」『和歌山県文化財学術調査報告』第2冊 1967年
- 39) 池田尚雄「出雲上島古墳調査報告」『古代学研究』第10号 1954年
- 40) 35) 花谷論文に同じ
- 41) 35) 花谷論文に同じ
- 42) 35) 花谷論文に同じ
- 43) 横山浩一「古墳時代須恵器の編年略表」『世界考古学大系』第3巻日本Ⅲ、古墳時代 1959年

- 44) 柳原木治「攝津福島の海北塚古墳『近畿地方古墳墓の調査』2、『日本古文化研究所報告』第4 1936年

45) 桶口隆康「雄山桃谷古墳」『京都府文化財調査報告』第22号 1961年

46) 川畠昭二「陶邑古墳址群」『平安学園考古学クラブ』1966年

47) 中村 法「陶邑」III『大阪府文化財調査報告』第30号 1978年

48) 日本書紀卷廿一

49) 奈良国立文化財研究所編「飛鳥寺発掘調査報告」『奈良國立文化財研究所学報』第5号 1958年

50) 三田市埋蔵文化財展パンフレット『古墳・村・館』三田市教育委員会 1985年

51) 50) に同じ

52) 宮本郁雄「北神ニュータウン内の古墳」甲子市史紀要『地の歴史』第12号 1985年7月



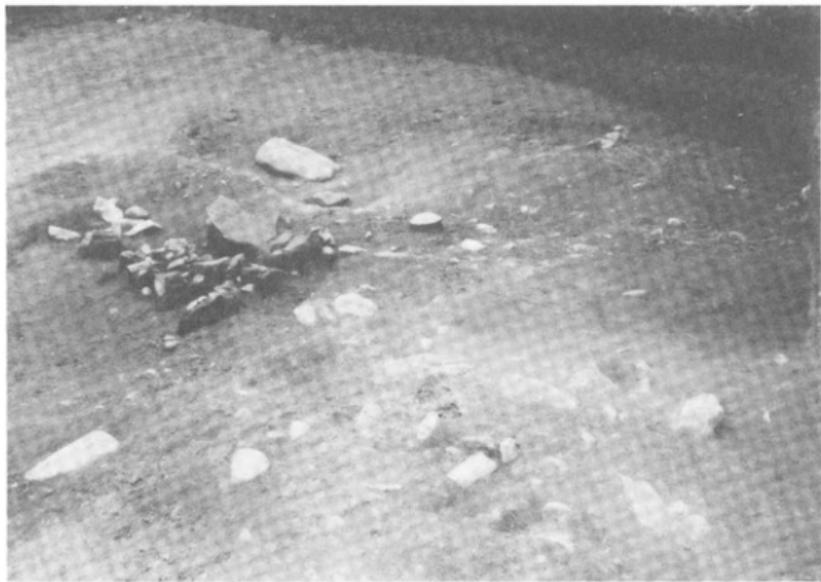
調査地遠景（北より）



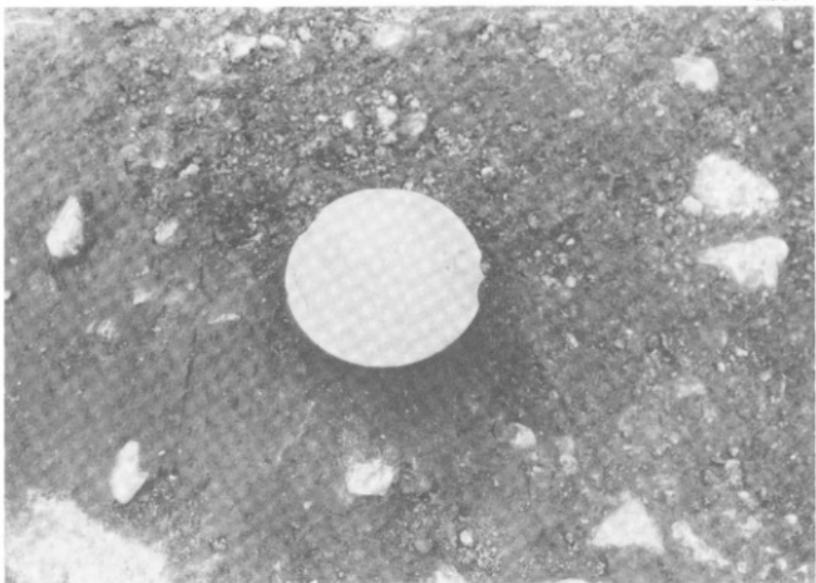
石室（北より）



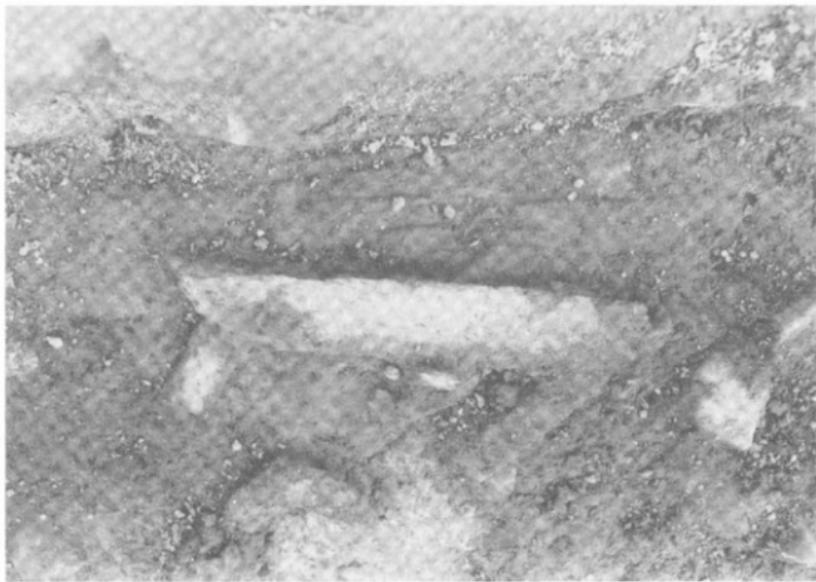
石室漢道部



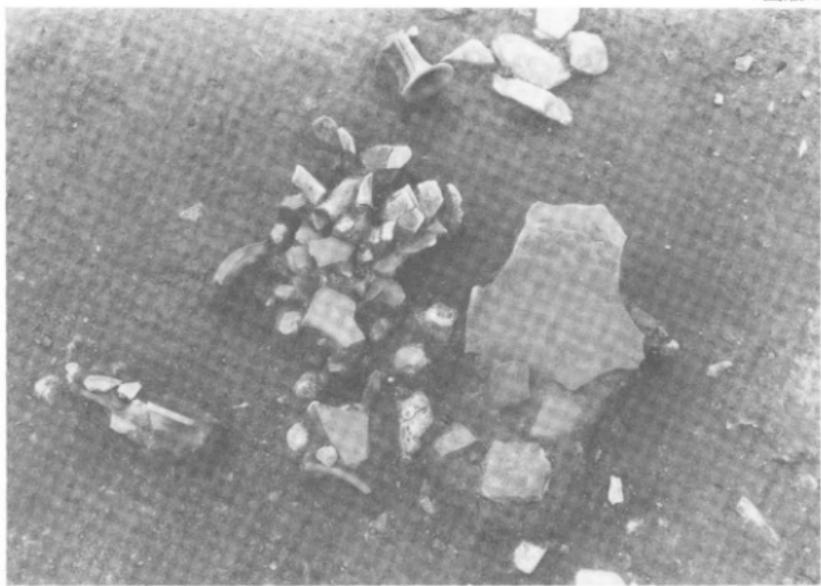
石室前庭部



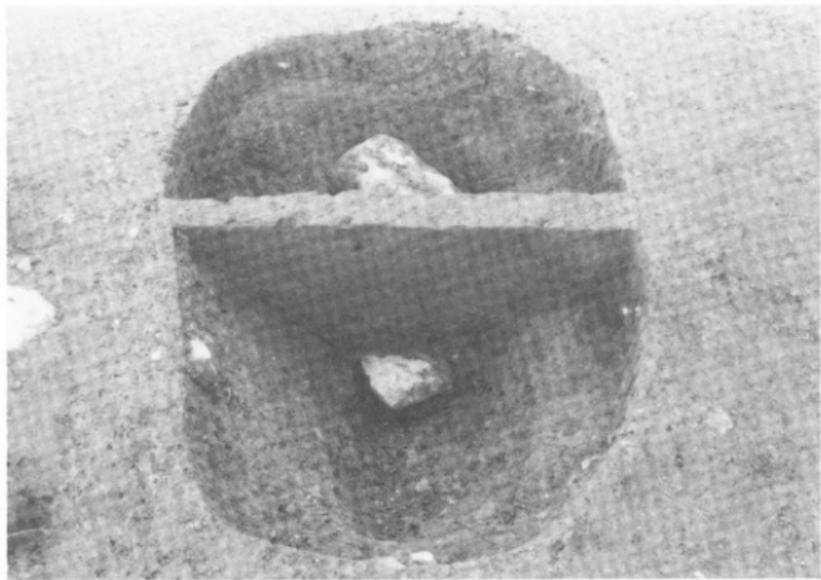
墳丘壺土器出土状態



玄室床面鐵刀出土状態

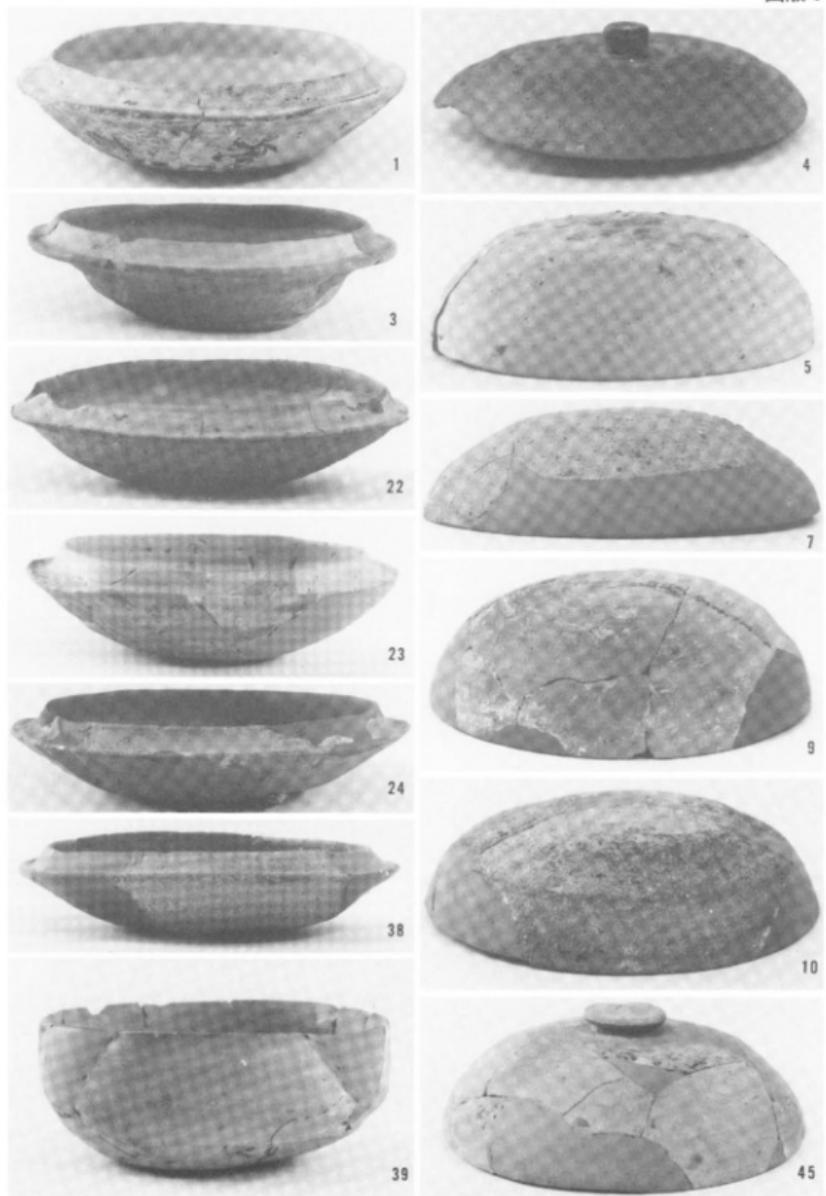


前庭部土壤土器出土状態



中世土壤基

図版 5  
遺  
物



出土土器(1)

圖版 6  
遺  
物



出土土器(2)

図版 7 遺物



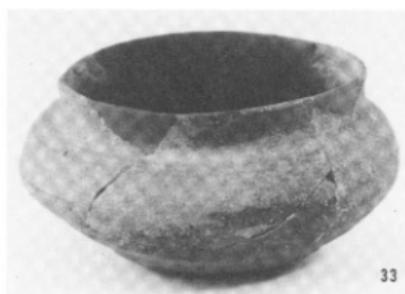
17



12



13



33



19

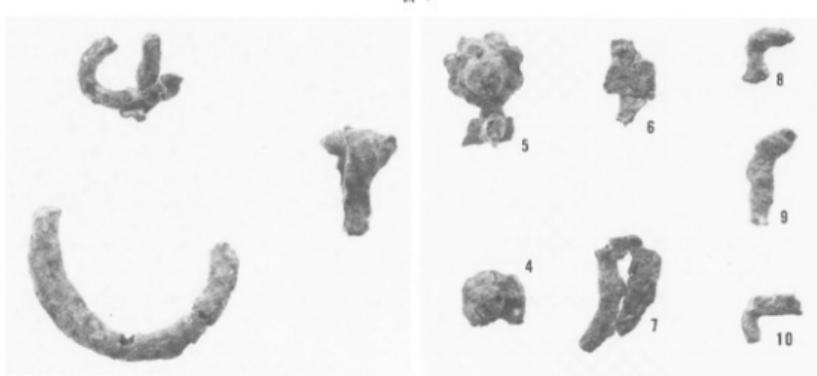
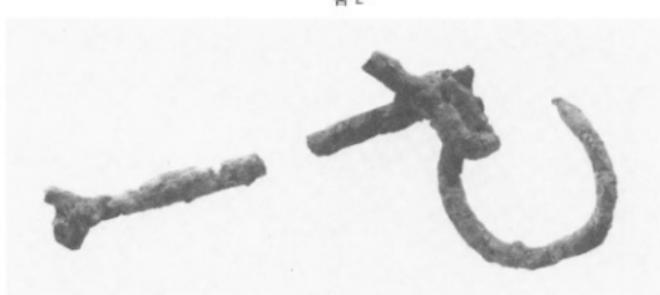
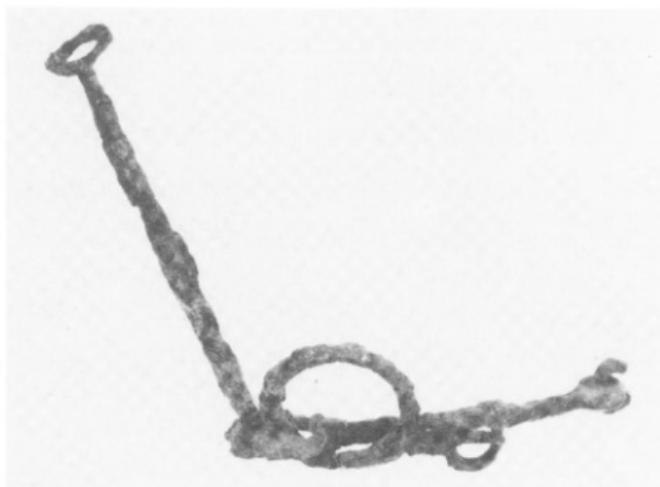


32



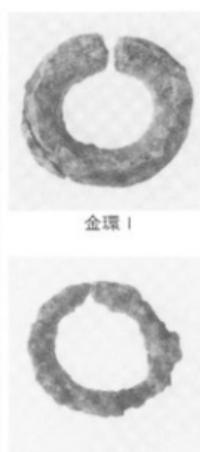
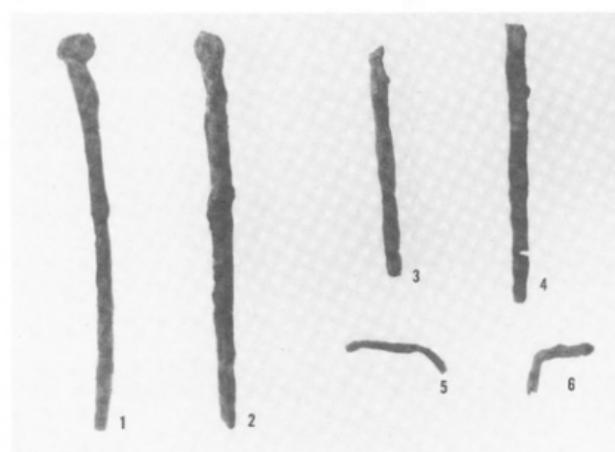
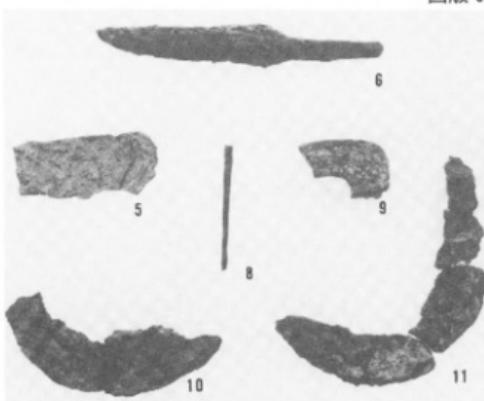
34

出土土器(3)



馬具類

図版 9 遺物



## オキダ古墳群発掘調査報告書

1987. 3 .31

発行 神戸市教育委員会  
神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印刷 神戸共同印刷株式会社  
神戸市中央区橋通4丁目1番3号

広報印刷物登録・昭和61年度第256号(A 6類)